血の家

作・森　馨由

登場人物

勝磯（かついそ）　淳子（じゅんこ）（三五）　…　長女・福岡に在住。

高倉　かのか（三二）　…　二女・横須賀在住・夫は自衛隊。（四年前に結婚）

勝磯　乃理子（のりこ）（二九）　…　三女・佐世保の実家に在住。

石清水（いわしみず）　海帆（みほ）（二六）　…　四女・福岡在住・夫は銀行員　三年前に結婚）

勝磯　夏帆（かほ）（二九）　…　五女・佐世保の実家に在住

＊＊＊＊＊＊

勝磯　なずな（三一）　…　泰平の四番目の正妻。

＊＊＊＊＊＊

高倉　丞清（すけきよ）（二八）　…　自衛官　現在、横須賀勤務　娘一人（舞凜（まりん）・二歳）

石清水　託也（たくや）（三一）　…　銀行員　福岡在住　子供なし。

里村（五五）　…　（劇中には出てこない）
父の元部下　実家の近所に住む、職業不定の男。

＊＊＊＊＊＊

勝磯　泰平（故・享年六〇）　…　勝磯家の主人。

（開幕）

☆　二〇一三年、初夏。
佐世保市重尾町。
比較的新しい住宅地の中を、一本の太い道が走っている。
その昔、見渡す限り田園風景だったその一帯は、新しくできた大型レジャー施設のおかげで開発が進んだらしい。
そうして、迎える交差点を曲がると、新興住宅地から時代が遡ったかのような風景が広がる。
右も左も田んぼばかり。
目新しくコンビニが出来ているその場所は、以前は、朽ちかけた軽トラックが長く放置してあった、古い精米屋だったように思う。

そこから車で五分ほど。
道は新しくなっているが、目に入る風景は、時間の流れから切り取られていた。
左手に折れ細い砂利道を行くと、ひっそりというにはあまりにも大きな日本家屋が建っている。

その『血の家』は、一七年前と、何ら姿を変えていなかった。

庭には柳の木が見える。
このまま庭に入っては、タクシーはUターンできない。タクシーは敷地の手前で停まった。
車から降り砂利を踏みしめる。

一七年ぶり。まさに、一七年ぶりに、淳子は我が家の前に立った。
時間の流れから切り離されたとはいえ、この家は独自の脈拍で時を刻んでいるはずだった。
それを感じた気もしたが、やがて、自分の鼓動が速まっているのだと気付く。

淳子は旅行バッグを持ち直し、その流れに足を踏み入れた。
体が引き裂かるような錯覚が襲う。呼吸が乱れる。
その目で見るまで、淳子には信じられなかった。
この家の『鬼』が死んだという事を。

☆
時刻　一三時四九分
舞台、庭から覗くと、居間が見える。
縁側の下には、何の為の道具か解らないが、鉈や斧などの林業用品や、鍬や鋤などの農具が押し込まれている。

庭には柳の木。そして、朽ちた花壇。

居間には葬儀屋が準備して行ったのであろう三段式祭壇と、白い布団に横たわっている、父、泰平。
その傍に、崩れるように一人の女性が座っている。
座っているというより、呆けていると言った方が正しい。
その女性は身重で、その下では、身重の女性の膝枕で横たわる、もう一人の女性。
身重の女性は涙を拭う仕草を見せ、横たわっている女性は眠っているらしい。

泰平（声のみ）　　我（わが）が、捨てた家に、帰って来たとか。

☆　不意に聞こえた父、泰平の声に、淳子は立ち尽くす。
身重の女性、淳子に気付く。

なずな　あら、……いらっしゃ、…あ、おかえりなさい。
淳子　…死んだんですよね？
なずな　えぇ？
淳子　あの人、死んだんでしょ？
なずな　……。
淳子　…どうしたんですか？　…何してるんですか？
なずな　あの、
淳子　乃理子！　起きんね！

☆　乃理子、ビックリして体を起こす。驚く乃理子をなずながあやす。
淳子、玄関より居間へ入って行く。

淳子　連絡とか、どうなってます？　親戚とか。ウチはこの人の仕事関係は解らんけど、連絡、入れてもらったとでしょうか？
なずな　もしかして、「じゅんこ」さん？
淳子　…そうですけど？
なずな　あぁ、あぁ、そうね。そうそう。電話と同じ声やもんねぇ。
淳子　…あなた、なずなさんでしょう？

☆　淳子、寝直している乃理子を見る。

淳子　乃理子、起きんね！
なずな　あぁ、あの、ノリちゃんは…、
淳子　他は？　どうなってます？
なずな　他って？
淳子　妹たちです。
なずな　あぁ、…ね。
淳子　…はい？
なずな　そうよねぇ。あのねぇ、まだ、淳子さんの携帯番号しか解らなくてぇ…。
淳子　は？
なずな　あの、二女の、かのか、さんの携帯番号、ウチ、知らんくてぇ。淳子さんの番号しか聞いとらんやったけん。そいにm夏帆（かほ）ちゃんは、昨日からねぇ、お芝居の稽古って言って、電波が届かんとよぉ。
淳子　…何、言って…、じゃあ、…え？　誰にも連絡付いとらんとですか？
なずな　あ、ううん。海帆（みほ）ちゃんは自宅にかけたと。留守電だったんだけどぉ、ついさっき、折り返しの電話があったとよ。そいでね、旦那さんと一緒に、夜に来るって。
淳子　…結局、あと、誰（だい）に連絡付いてなかと？
なずな　あ、あ～、あの、んふ、ウチも…、ちょっと、会ったことなか子がおるもんやけん…。えーっと、（淳子を指差しながら）「じゅんこ」さんやろ？　でね？　あ、「かのか」さんの連絡先の解らんと。
淳子　解らんって…、
なずな　そいで、（乃理子の頭を撫でながら）「のりこ」ちゃんやろ？　で、「みほ」ちゃんは、さっき電話で話したけん、あとは、「かほ」ちゃんの携帯に繋がれば…。
（なずなの話の途中から、携帯を掛けている。）…もしもし？　かのか？
淳子　あ、…ごめんなさいね？
なずな　…あ、そう。うん。解った。うん、うん。そいは、後で連絡入れる。はいはい。（切る）
淳子　あのねぇ、そいけん、かのかさんの電話番号の解らんやったけん…、

淳子　もう、海帆から連絡が来たそうです。
なずな　ん。そぉ。さっきねぇ、海帆ちゃんに頼んだと。
淳子　今日中には着ききらんって言いよるけん、明日来るそうです。
なずな　そう。そうねぇ、急なことやったもんねぇ。
淳子　……。
なずな　……。
淳子　乃理子！　起きんね！
なずな　あの、淳子さん？　ノリちゃんはね、
淳子　葬儀屋さんは？
なずな　あの、（テーブルを差す）そいば、置いて行かしたとよ。

☆　淳子、なずなが差した書類を手に取る。

なずな　あれねぇ、やっぱり、…人が死んだっていうとに、ととしかよねぇ。何て言うと？　矢継ぎ早にね、…そう、矢継ぎ早に、説明さすとよ。
淳子　（書類の目を通しながら）取り敢えず、…新聞のお悔やみ覧に載るとは明日の朝やろうけん、その前に親戚だけは連絡ば取らんと。

☆　なずなと淳子の会話の間に、乃理子がゆっくりと体を起こし、淳子の後ろに行く。

淳子　…親戚。…親戚ねぇ…。

☆　乃理子、淳子の背中に抱き着く。

淳子　ぎゃあああ！
なずな　ああ、ノリちゃん。
淳子　何ばするとね！？
なずな　（立ち上がりながら）コラコラ、ダメよ。
淳子　アンタ！　乃理子！　何ね、どがんしたと！？
乃理子　お…ね、ちゃ…、おね…ちゃ…。
淳子　あぁ？
なずな　コラコラ。（乃理子の肩を抱く）お姉ちゃん、ビックリしとらすよ？　いかんよ、ノリちゃん。

☆　乃理子、なずなに従って淳子から離れる。

淳子　な、なん、ね？　どがんしたと？
なずな　あのねぇ、淳子さん。ノリちゃんねぇ、…半年くらい前に、頭ば打ってねぇ。
淳子　…え？
なずな　あの、

☆　なずな、庭の柳の木を差す。淳子、その指の先を見詰め、不快な表情を作る。

なずな　あの木に登ってねぇ、落ちて頭ば打ったとよ。
淳子　…冗談やろ？
なずな　ううん、ううん。冗談なんかじゃなかとよ！　ホントに、大変かったとよぉ。
淳子　…そがん、…バカバカしか。…何ね？　何ね、この茶番は？　ウチが帰って来たとが、そがん迷惑かとね？
なずな　そがん！　そがんことなかよぉ。淳子さんは、ここの娘さんやもん。ウチ、帰って来てくれて、心強かぁ。

淳子　大体、何してるんですか？　あの人が死んで、ここで、こがん、ボーっと二人で座っとったと？
なずな　…だって、…ウチ、こがん（お腹を擦る）やし、…ノリちゃんも…。ウチ、心細くてぇ。そいけん、淳子さんの帰って来てくれて、ホントに心強かとよ。
淳子　することは、山んごとあるでしょ？
なずな　そう。そうね。…うん。解る。
淳子　そいけん、

☆　自宅の電話が鳴る。

淳子　……。
なずな　…あの、…ちょっと、んふ、タイムね、タイム。

☆　なずな、乃理子を連れてゆっくりゆっくりと電話へ向かう。
淳子は口を開きかけたが、思い立って奥の部屋へ向かう。

なずな　はい？　もしもし？　あぁ、どうも。えぇ。はいはい。

☆　乃理子、なずなから離れ、ゆっくりゆっくりと泰平の遺体へ近付く。

なずな　そいは、大丈夫です。えぇ。もう、淳子さんの帰って来（こ）らしたし。えぇ。心強かです。

☆　乃理子、泰平の傍らに座り込み、泰平の遺体に抱き着く。

なずな　はい、はい。そうですね…、あぁ、ノリちゃん！　いかんよ！

☆　なずなの声に、淳子が慌てて戻って来る。
手にはグラスに入った麦茶を持っていたが、それをテーブルへ置き、乃理子の元へ駆け寄る。

なずな　あ、あの、ちょっと、また後から、
淳子　コラ、乃理子！　アンタ、何しよると！？　離れんね！
なずな　はい。はい。えぇ。そいは、もう。承知しとります。
淳子　乃理子！　やめんね！　そいは死体ばい！　汚か！！

☆　なずな、電話を切る。同時に淳子が、乃理子を泰平から引き離す。

なずな　汚かって…。
淳子　何しよるとね？　早（はよ）う、手ば洗って来なさい！
乃理子　お…、さん、寝…すと？
淳子　やー！　ヤメテよ！　その手で触らんで！　早う！　手ば、（なずなへ）早う、見とらんで、乃理子ば連れてって下さい！

☆　なずな、淳子に言われ、ハッとしたように乃理子に近付く。

淳子　何ね、何ね、こん子は？　どがんしてしもうたと？
なずな　ノリちゃん。父様（ととさま）はねぇ、もう、仏さんになってしもうたとよぉ。触ったらいかんとよ。
乃理子　…と、さん、…寝と…と？
淳子　…ホントに？　ホントに、そがんなってしもうたと？

なずな　…父様は、あん木（柳）の祟りって言うて、ホント、大騒ぎさしたとよぉ。『あん木のせいで、また、こがんことになってしもうた！』って言うてねぇ。…もう、斧ば持って来てね。……。

淳子　『こがん縁起の悪か木は、たたっ伐ってやるばい！』ってねぇ…、やめて下さい。

なずな　…あ、…ごめんなさい。

淳子　…誰からやったとですか？

なずな　え？　…あぁ、父様のね、知り合いの方。とにもかくにも、ウチが一番に連絡ば入れたとよ。ホント、ノリちゃんと二人で、心細かったけん。

淳子　…とにかく、ここでこうしてても仕方ないんで。

なずな　そう、そうねぇ。…取り敢えず、出前でも取りましょうかねぇ。

淳子　何で？

なずな　もう、お昼も過ぎとったとねぇ。ごめんねぇ、ウチ、気ぃ利かんやろぉ？

淳子　出前はいいですから。

なずな　…でも、家には、食べるもん、ナンも無かよぉ？

淳子　…それは、後で考えますから。とにかく、…進んでるところまで、説明して下さい。

なずな　説明も…ナンも…。

淳子　要は、何も進んどらんとでしょ？

なずな　…ただ、今朝、父様が布団の中で冷とうなっとった…。そいだけよ。

☆　なずな、乃理子を連れて奥の部屋へ。
淳子は崩れそうになる足を奮い立たせ、また、テーブルに近付き、麦茶を飲みながら書類を見る。

泰平（声のみ）　あぁ、忌々しか。あてつけがましか。伐り倒してしまえ、こがんとは。

☆　淳子、耳を押さえジッと耐え、泰平の遺体を見ようとして慌てて視線を逸らす。

淳子　…まず、…田平（たびら）の叔母さんだけは…、連絡せんば…。

泰平（声のみ）　なんか、そがん、恨みがましか目で。早う、出て行かんか。

☆　時刻は、やがて夕方へと移って行く。
なずなは淳子に言われるままに、焼香の順番を書類に書き込み、受付をしてくれる人員を探す。
何度か電話の前に立ち、付き合いもなかったような親戚に電話を掛ける。
淳子はそれを疲れた目で見ていた。
更に、なずなは、書類にイタズラ書きをする乃理子を時折たしなめ、そうして、泰平の前へ座り線香をあげた。

☆　時刻　一六時二七分。
庭より、大音量で邦楽が聴こえてくる。乃理子、嬉しそうに立ち上がり縁側へ向かう。

なずな　あぁ、夏帆ちゃんの帰って来らした。

淳子　夏帆？

なずな　夏帆ちゃんねぇ、嵐の大ファンでねぇ。んふ、いっつも、このボリューム。

淳子　……。

なずな　ウチは、やっぱ大野君が好きとけど、淳子さんは？

淳子　（立ち上がり、縁側へ向かいながら）…ウチは、松潤です。

なずな　ああ！　松潤！

☆　車は庭に停まったらしく、ピタリと音楽が止む。

乃理子　お…えり、…ほちゃ…。
淳子　夏帆！

☆　呼ばれて、という訳ではないが、一人の女性が縁側の前に歩いて来る。

淳子　何しよったと？　いつまでも連絡付かんで！

☆　夏帆と呼ばれた女性、訝しそうにサングラスを外し淳子を見上げる。

淳子　あの人、死んだとよ！
夏帆　……もしかして、淳子…姉さん？
淳子　そうよ。
夏帆　あぁ、久しぶり。…ビックリした。実物見るの久しぶりやけん。
淳子　何しよったと、今まで？
夏帆　そいより、どがんしたと？　何で、…ココに居ると？
なずな　夏帆ちゃん。父様が…、父様が！
夏帆　え？　パパ、どがんかしたと？

☆　夏帆、立ちはだかる淳子を避け、縁側から家へ上がろうとする。
淳子、そんな夏帆の行く手を阻みながら。

淳子　ウチの部屋。…アンタが使いよると？
夏帆　え？
淳子　ウチの部屋！
夏帆　…なに？　何のハナシ？
乃理子　か…ちゃん…、おか…り！

☆　乃理子、嬉しさのあまりか、縁側からダイブして夏帆に飛びつく。

夏帆　ちょっ、ノリちゃん。
乃理子　…ほちゃ、お…えり。
淳子　あの部屋は、ウチの部屋ばい！
夏帆　やめんね、ノリちゃん。え、部屋って、
淳子　ウチのあの部屋！　だいが勝手に使うてよかって言うたと？
乃理子　かほ…ちゃ、見…、見て…、

☆　乃理子、柳の木を指差して夏帆の服を引っ張る。

夏帆　ノリちゃん。ノリちゃん、そがん力で引っ張らんで。ちょっ、やめてって。
淳子　乃理子！　大人しくしときなさい！

☆　乃理子、言われて夏帆を引っ張るのを止める。
夏帆、乃理子を気にしつつも、先ほどから父の話も気になっている。

淳子　上がんなさい。
夏帆　（なずなに）…パパ、どがんしたと？
淳子　こがん時に、携帯ば切って。
なずな　父様、…死んでしもうたとよぉ。
淳子　勝手か事ばっかいして。
夏帆　…え？　…マジすか。

☆　夏帆、縁側から家へ上がる。
淳子は庭を見詰めている。庭では乃理子がゆっくりと柳の木に近付き木を見上げている。

夏帆　きゃー！　どうして？　どうして、パパ！
なずな　夏帆ちゃん。夏帆ちゃん、父様にお線香、上げてやって。
夏帆　嘘―！　パパ！　パパー！　あはははは、あはははは。
なずな　何で、何で、笑うとぉ？

☆　乃理子、柳の木を触ろうとする。

淳子　乃理子！

☆　呼ばれて、乃理子は手を止める。

淳子　コッチおいで。
乃理子　……こ…こ。
淳子　…解ってるから、…コッチおいで。

☆　淳子、乃理子に手招きする。乃理子は嬉しそうに淳子へ近付く。

淳子　…昔っから、何考えてるか解らんかったけど。
乃理子　お…ちゃん、…ね、ちゃ…。
淳子　…こがんなってしもうたと？　アンタは、この家には負けんって…思うとったとに…。
乃理子　ね、ちゃ…。ら、め…。ら―…め…食べ…、
淳子　ん？
乃理子　ら―…、め、食…よ。
淳子　なんて？
乃理子　ね、ちゃ…、
淳子　姉ちゃん。
乃理子　（頷く）ら―、め…、
淳子　ら―め…、ラーメン？
乃理子　（更に嬉しそうに頷く）食べ…、
淳子　（奥の二人に）ラーメン食べようって言ってる。

☆　奥では二人が何事かを言い合っている。

淳子　アンタ、裸足たいね。
乃理子　ね…ちゃ。（淳子に抱きつく）
淳子　やめなさい。（乃理子の頭を押し戻す）ココ（縁側）に座って。ね？　足拭いてから上がらんば。
待っときなさい。
乃理子　…あ、い。
淳子　（何となく、淳子の頭を撫でる）待っときなさいよ？
乃理子　あい。

☆　淳子、縁側から離れ奥の部屋へ。

夏帆　…ビックリした。
なずな　うん。そうやろうぉ？　解る。
夏帆　淳子姉さん…、一番目の奥さんにソックリなんだもんね。
なずな　…あ、あら、そう？　ウチ、解らんばい。

夏帆　ウチも、一番目の奥さんは…写真で見ただけやけど。

☆　夏帆、泰平の傍から離れ、縁側の乃理子の傍に行く。

夏帆　ノリちゃん、ただいま。
乃理子　お…えり、か…ちゃん。
夏帆　パパ、死んじゃったねぇ。
乃理子　……ほちゃ、…泣か…な…で。ほちゃ…、らー…め、食べ…よ。

☆　淳子、雑巾を持って戻って来る。

淳子　ホラ、こいで拭いてやって。
夏帆　（雑巾を受け取りながら）ホラ。ノリちゃん。自分で拭いて。
乃理子　……ん。（雑巾を受け取る）
淳子　明日が仮通夜、明後日が本通夜、明々後日（しあさって）が葬式ばい。
夏帆　え？　…え？　ちょっと、長くない？
淳子　明後日、友引で火葬場が休みやけん、伸びたったい。

☆　乃理子、雑巾を振り回す。

夏帆　何、それ？　じゃあ、…明後日まで、パパ、…ちょ、ノリちゃん、やめなさい。ホラ、足、拭き拭き。明後日まで、パパ、あのまま？
淳子　やろうね。
夏帆　…えー。
なずな　じゃあ、みんな揃ったけん、出前でも取ろうか？
淳子　…出前って。
夏帆　ノリちゃん、ラーメン、食べれるよ。
乃理子　らー、…ん。めん…。
淳子　…食べ終わったら、もういい加減、色々決めてしまわんば。

☆　夏帆、乃理子を誘導して居間へ戻る。

なずな　そう。そうね。
夏帆　色々って？　全部、葬式屋さんがやってくれるんじゃなかと？　ウチのママんの時も、ほとんど葬儀屋さんに任せっきりやったごたんよ？
淳子　え？　…佀子（よしこ）さん、亡くなったと？
夏帆　うん。
淳子　って言うか、連絡、取りよったと？
夏帆　ううん。パパから聞いた。ウチと海帆（みほ）だけ参列したとよ。…四年前、…ホラ、ちょうど、かのか姉さんの結婚式と重なって、ウチら、結婚式、欠席したろ？
淳子　何ね、何で、そん時に教えてくれんやったと？
夏帆　え？　何で？
淳子　何でって、
夏帆　もしかして、ママのコト、『お母さん』って思ってくれてるの？
淳子　だって、そりゃ、…だって、佀子さんが一番長いお母さんやったとよ。
夏帆　…そっかぁ。そうだよね…。ごめん…。
淳子　…そりゃ、…本気で『お母さん』と思っとるか、って聞かれたら、…まぁ、思っとらんけど。

夏帆　そうやろ？
淳子　けど、…そがんとは、知らんやったじゃ済まんやろ？　ちゃんとしとかんば。
夏帆　そがん、…大した葬儀でもなかったよ。ママは…、ホラ、家族居（お）らんかったしねぇ。

☆　なずな、出前のメニューを淳子に渡そうとする。

淳子　あ、ウチは、何でもいいです。
乃理子　らー、め…。
夏帆　ウチも、普通のラーメンで。
なずな　あ、じゃあ、（素晴らしい事を思い付いたように手を叩く）ラーメン四つにしよう！

☆　なずな、何故かウキウキしながら、電話へ向かう。

夏帆　…ごめんね？　ママのコト、ちゃんと報せんで。
淳子　や、ううん。…ナンか、難しかよね。ってか、複雑って言うか。
夏帆　…ホント、すんごく寂しいお葬式だった。
淳子　…そうね。
夏帆　この家ば出て、ママはあんまり幸せじゃなかったかもしれんね。とにかく…、ロクな人生じゃなかったっちゃなかかな。
淳子　…この家に居るとも、幸せとは言えんけどね。そいより、…乃理子はどがんしてしもうたと？
夏帆　あ、…そっか。淳子姉さんは、知らんとよね？
淳子　聞いたけど。
夏帆　あん時は、ウチも家に居ったけど、…夜中でね、何でノリちゃんが木に登ったか解らんとけど、

☆　なずな、電話を切って。

なずな　あぁん、しもたぁ！　麺堂さん、今日、お休みやったぁ！
夏帆　……。
淳子　……。
なずな　今日、…あん、もぅ。水曜日やったぁ？　水曜日は定休日やんねぇ。
夏帆　ノリちゃん、ラーメンはお預けのごたんよ。
乃理子　らー…め…ん。らー…め…。（嬉しそう）
夏帆　…ね、淳子姉さん。部屋って何？

☆　なずな、電話帳を引っ張り出し、出前してくれそうなラーメン屋を探す。

淳子　あぁ…。
夏帆　…あの部屋、ウチが使っちゃ、マズかった？
乃理子　ね…ちゃ、…らーめ…。

☆　乃理子、テーブルの上で見付けた輪ゴムを引っ張り、淳子と夏帆に見せる。

淳子　……別に。
夏帆　…ウソ。思いっきり不満そうじゃん。
淳子　だって、あの部屋、ウチの部屋やったもん！
夏帆　しょうがないやろ？　ウチだって、部屋が必要やったとやもん。
乃理子　らー…めん…、食べ…よ。
なずな　あ、もしもし？　あ、配達は…？　あ、そうですかぁ。よかったぁ？　お宅、豚骨？
夏帆　…淳子姉さん、もう一七年も戻らんけん、ウチが使こうて良かかなぁって。

なずな　あ、そ？　豚骨味噌？
淳子　…戻らんやったっちゃなか。戻れんやったとさ！
なずな　（淳子と夏帆に）ねぇ、豚骨もあるけど、豚骨味噌もおススメって言いよらすけどぉ、どがんする？
夏帆　良かよ、何でも。お任せする。
淳子　そがんやって、ウチの部屋まで取られたら、戻って来られんたい。
夏帆　なん、取られたらって？
なずな　（電話に）お任せするって言われてもねぇ。え？　ああ、そしたら、…その、今日だって、ウチ、大事な仕事のあったとに。アンタはいっちょん宛にならん。
淳子　（淳子と夏帆に）そいぎん、その、おススメの豚骨味噌にするけど、トッピングはどがんするかって…。
なずな　どがんちゃ、良かです。
夏帆　え―…？　（電話に）あ、もしもし、えぇ、えぇ。あ、はい。
淳子　…ウチだって、もうすぐお芝居の公演のあるけん、稽古、忙しかとやもん。
夏帆　そがんとは遊びのごたんモンたい。
なずな　遊びじゃなかよ！
乃理子　はい。はい。えぇ、一応、付けて下さい。はい。はい。よろしくお願いしますぅ。（切る）
淳子　ね…ちゃ、…か、ほ…ちゃ、ら―…め…ん。（輪ゴムを口に入れようとする）
夏帆　コラ、何しよるね、汚か！
自分が帰って来んやったたい！　自分が、…一七年も…！

☆　夏帆、そう言って奥の部屋へ走り去る。

なずな　…どがんしたと？
乃理子　かほ…ちゃ、お…ごっ…こ（鬼ごっこ）。

☆　乃理子も夏帆の後を追って、ゆっくり去って行く。
なずなが電話から離れ、淳子の隣へやって来る。

なずな　…姉妹喧嘩？　羨ましかねぇ。ウチね、一人っ子やったけん、そういうとに憧れとった…、
淳子　そがんじゃなかです。
なずな　……。
淳子　放っといてください。

☆　淳子、そう言って耳を塞ぐ。

なずな　…あ、そうやった…。…麦茶ば沸かさんばやった。

☆　なずな、淳子から離れ、奥の部屋へ。

泰平（声のみ）　なんか、バタバタして。やかましか。お父さんの帰って来たとに、おかえりなさいも言いきらんとか。見ろ、コイツのこの目。こいが父親ば見る目か。

☆　時刻は、やがて夜へと移って行く。
四人はなずながトッピングで頼んだ「辛さ×十倍」の出前ラーメンを食べ、汗をかき、麦茶をがぶ飲みした。
それから、一度、自宅に電話が入った。なずなが対応し、淳子と夏帆は葬儀屋が置いて行った書類を見て、頭を悩ませている。

☆　時刻　二十時十五分。
庭より車が停車する音が聞こえ、乃理子が嬉しそうに縁側へ行く。

夏帆　じゃあ、ビールと、焼酎と、…あと…。
淳子　ジュースとお茶と。
夏帆　ホラ、コレ（葬儀屋のパンフレットを見て）ココに、頼めば出してくれるって書いてあるたい。
淳子　ダメダメ。葬儀屋さんのは高かと。持ち込んだ方が、安うつくと。

☆　チャイムが鳴る。

なずな　あら。（立ち上がり）ね？　ウチ、どこもおかしゅうなか？
夏帆　…大丈夫ばい。
なずな　ちょっと、行って来るね。

☆　もう一度、チャイム。なずな、玄関へ向かう。

淳子　海帆やろうかね？
夏帆　…多分。
淳子　海帆に解るやろうか？
夏帆　何が？
淳子　あの人の、アレ（泰平を指差す）の職場関係の人さ。
夏帆　…親戚でも、これだけ掻き集めて五人くらいしか思い付かんとにぃ。

☆　乃理子、縁側から戻り、ゆっくりゆっくりと玄関へ向かう。

夏帆　ノリちゃん、ダメよ。
乃理子　…お…きゃ…く、
夏帆　客じゃなかよ。

☆　玄関の方から、男女の声が響く。
どうやら、四女、海帆とその夫の託也、そして、なずなが話しているらしい。

淳子　海帆、のごたんね。
夏帆　（立ち上がり、乃理子の傍へ行く）ホラ、ノリちゃん。コッチ来ときなさい。

☆　夏帆が乃理子を連れ部屋の奥へ行く。入れ替わるように三人が入ってくる。淳子、一応立ち上がる。

なずな　…あ、あの、ホラ、淳子さんよ。長女の。
海帆　淳子…姉さん？
託也　やぁ、どうも。初めまして。
淳子　初めまして。
託也　僕、あの、海帆さんの夫の、石清水託也と申します。（内ポケットから名刺を出す）コレ。
淳子　あ、あぁ、どうも、ご丁寧に…。
託也　やぁ、突然の報せで、ビックリしましたよ。先月、こちらに伺った時は、お義父さん、元気だったから。
淳子　は…、そうですか…。
託也　今日はすぐに早退できなくて。本当に、遅くなってすみませんでした。
淳子　あ、いいえ。

☆　託也、背広の上着を脱ぎながら居間へ入ってくる。

海帆　…久しぶり。淳子姉さん。
淳子　久しぶりやね。
海帆　…あ、かーほ！
夏帆　お疲れ。

☆　海帆、荷物を置き、夏帆の元へ走る。

海帆　久しぶりぃ！　元気やったぁ？
夏帆　うん。海帆も…、
託也　おいおい、海帆ちゃん。先にお義父さんに線香あげないと。

☆　託也、海帆たちの元へ歩み寄ろうとすると、海帆たちの前に乃理子が立ちはだかる。

託也　ん？　どうしたの？　ノリちゃん。俺だよ、俺。
海帆　ノリちゃん。

☆　海帆、乃理子の腕を引き自分の方へ乃理子を寄せる。

託也　参ったな。（淳子に）俺、全然、ノリちゃんに覚えてもらえてないんすよ。
淳子　あ、あぁ、どうぞ。ホラ、海帆も。お線香上げれば？
託也　やぁ、ホント、信じらんないなぁ。

☆　託也、言いながら泰平の前へ。海帆、慌ててそれに続く。

託也　お義父さん。また、急に、どがんさしたとですかぁ？
なずな　あのね、お医者様の話やと、脳梗塞って。
託也　そうですかぁ。…やぁ、残念だなぁ。
なずな　自宅で亡くなった時は、あれね、警察とか来るとねぇ。
淳子　え、警察？
なずな　あ、ええ。父様の様子がおかしいって気付いたとは、朝…五時？　五時半？　くらいやったろうかぁ。救急車ば呼んでもねぇ、亡くなってしもおうとらすけん、搬送してもね、っていうことになって。そうこうしよる内に、パトカーまで来てしもうて。
淳子　来たの？　ここにパトカーが？
なずな　えぇ。一応ねぇ、ウチも…何て言うと？　取り調べ？　受けたとよ。
託也　何もないって証明するためですよ。別に、ここが特別って訳じゃなかとです。
淳子　何で言わんかったと？
なずな　え、あぁ、あぁ、そうねぇ。ごめんなさい。
淳子　じゃあ、明け方にパトカーの来たってこと？　ここに？
託也　いや、逆に、事件性がなかって、確認の為ですよぉ。
なずな　そうね、そう。そがん長く居らした訳じゃなかとよ？　ウチだって、人がどがん仕組みで脳梗塞になるかなんか、そがん、知らんし。…一緒に居ったとは、ノリちゃんやったし。
淳子　でも、…みっともなかたい。そがん、パトカーの来るって…。

☆　淳子、庭の柳の木を見る。

託也　…でも、そいやったら、大変やったでしょう？　お義母さんも。
なずな　あぁ、…ウチは、そがん、全然…。そいより、ノリちゃんが興奮してしもうてねぇ。
海帆　ね、あの、…それもだけど、…ナンか食べる物ないかな？　途中でどこかに寄ろうと思ったとけど、なかなか、好みに合うような店もなかし…、
託也　海帆ちゃん。こがん時に、食べ物の話なんかして。

海帆　あ、…ごめんなさい。
淳子　何もなかけん、ウチらも出前ば取ったとよ。

☆　夏帆、奥から麦茶を二人前持ってくる。

託也　あぁ、ありがとう、夏帆ちゃん。
なずな　そうね。取り敢えず、座って。ちょっと、ゆっくりして下さい。
託也　あ、上着。掛ける物あります？
海帆　あ、ハンガー取ってくる。

☆　託也、上着を適当に放ると居間に座り、断りなくテーブルの上の書類を見る。

託也　花はねぇ、ウチの職場からも届くと思うけど。
淳子　あぁ、そいは助かります。…言うても、家は親戚も少なかし。
託也　あんまり寂しかったらねぇ、貧相かですもんねぇ。
淳子　…そうですねぇ。…ま、別に、そがん盛大にせんちゃ良かとけど。
託也　ご親戚、…五人？　この方たちは、いつお見えになります？
淳子　あぁ、…いえ、もう、斎場に真っ直ぐ来て下さいって、伝えてますけど？
託也　明日が…仮通夜で、明後日が本通夜でしょう？
淳子　はい。
託也　お料理とかは？　ここもね、今日はだいも来らっさんでも、明日は、お義父さんのお友達とか、仕事関係の方とか、来るかもしれんし。
淳子　まぁ、仮通夜やけん、多分、誰も来んと思うとですけどねぇ。
託也　仕出し屋さんにアテとかありますか？
淳子　いえ、何せ、…ウチは一七年ぶりに、佐世保に戻ったけん…。…アンタ達は？　心当たりある？

☆　淳子に聞かれ、海帆と夏帆は首を振る。

託也　（ポケットから携帯を出しながら）や、大丈夫ですよ。おいはコッチにも同僚のおるし、ちょっと聞いてみますけん。
淳子　あ、や、別に、そがんとは適当で…、
託也　この家は女ばっかいやけん、下手に吹っ掛けてくるごたんトコには、頼めんでしょ？
（携帯電話に向かって）あぁ、ごめんね。おい、おい。

☆　託也、喋りながら玄関の方へ。

淳子　……あ、なんか…、シッカリしとらすとね、…託也、さん、やったっけ？
海帆　淳子姉さん。
淳子　ん？
海帆　嘘。信じらんない。
淳子　なんが？
海帆　だって、…ナンか、…だって、一七年ぶりばい？
淳子　…そうやね。アンタ達、…もう大きうなったとね。
海帆　……。（泣く）
淳子　…え？　そがん、泣くほどの事？

☆　託也、戻って来る。

託也　大丈夫。いいお店、教えてもらいましたよ。

☆　海帆、慌てて淳子から離れる。

託也　すぐにメニュー表持って来て、見積もりも出してくれるそうです。ここ、重尾（しげお）町で良かとですよね？

淳子　あ、はい。

託也　今、（携帯を見る）八時過ぎか…。いや、こういうのって、結構遅くまでやってくれるとですね。

淳子　あ、別に、明日でも良かったとに…。

託也　良かとですよ。大丈夫ですけん。

淳子　じゃなくて…、今日はもう遅かし、…みんな、疲れとるし。…明日の朝からにしてもらった方が…。

託也　…あぁ、そうか。そうですよねぇ。お義姉さんもお義母さんも、朝からバタバタで、疲れとらすもんね。

淳子　…あ、や、まぁ…。

☆　沈黙。やがて、託也の携帯が鳴る。

託也　あ、…すんません。（玄関に引き返しながら）もしもし？

夏帆　姉さん。

淳子　…ん、ウチ？

夏帆　…あの…、さっきの続き、してしまわん？

淳子　ん？

夏帆　明日からの事、早う、決めてしまわん？

淳子　ん、けど、よう考えたらさ、明日の仮通夜で、家ば訪ねてくる人の居るやろか？

夏帆　…そいは、解らんけど。

淳子　今夜は疲れたし、…明日考えても間に合うっちゃなかかね？

海帆　でも、…あの、明日じゃ間に合わんかもしれん。この辺でも、車で行けば、まだ全然、開いとる店もあるし。夏帆に車出してもらえば、買い出しくらい…、

淳子　えー？　今から？

☆　託也、戻って来る。

託也　じゃあ、ひとまず、今夜の分だけは、注文しときましたから。お義母さん、ビールとかありますか？

なずな　あ、あぁ、そいが、ウチ、今日は一日中、…もうテンパっとってねぇ。

淳子　あ、あの、託也さん？　実はね、まだ、明日が仮通夜ってことでね、ようやく、さっき親戚に連絡のついたくらいで、今夜は、特に誰（だい）も来んと思うとよ。

海帆　あ、…ウチ、ちょっとそこまで、夏帆と買い出しに行って来るよ。ビールで良かとよね？

淳子　…あ、もしかして、…誰か来るの？

☆　淳子、要領を得ず、全員をぐるりと見回す。

乃理子　きゃ、く…じゃ…な、か。（託也を指差す）

海帆　あ、でも…、

夏帆　でも、来るかもしれん！　解らんもん、そいばっかいは。

淳子　…そう？　いや、…そしたら、…行って来る…？

託也　お義姉さん。こがん田舎じゃあ、一般的なごと行かんですよ。

淳子　え？

託也　お義父さんと親しか人やったら、時間も考えずに来るっちゃなかとですかね？

淳子　…でも、近所の人も来らっさんとに…。
託也　あ、…じゃあ、…取り消しましょうか？　さっき注文した分。
淳子　や、別に…、無駄にならんなら…、
海帆　いいよ、取り消しなんか。だって、姉さん、託也君がせっかく気ぃ利かせてくれとるとやけん。
淳子　…何ね、別に、ウチはおかしか事、言いよらんたい。好いたごとすれば？　誰が来らすとか知らんけど。

☆　淳子、言いながら奥の部屋へ。

なずな　あ、淳子さん、どこに行くと？
淳子　部屋に戻っとく。…朝から、…色んなことのあり過ぎて、頭の痛かけん。
なずな　そう、
夏帆　や、待って！　部屋って、ウチの部屋やろ？　待って、姉さん！

☆　夏帆、急いで淳子を追いかける。それに続き乃理子もゆっくりと二人を追いかける。

乃理子　お…に、…ごっこ…。

☆　三人が去った後、託也は不愉快そうにネクタイを緩め、また葬儀屋のパンフレットに目を落とす。

☆　時刻は、やがて深夜へと移って行く。
夏帆と海帆は車で買い出しへ行き、なずなは、配達された寿司を受け取り、それを託也へ出す。
託也は着替え、寿司を食べ、夏帆たちが買ってきたビールを飲む。
夏帆の膝枕で乃理子がウトウトし始める。海帆となずなは、交互に線香の番をする。

☆　時刻　午前二時三七分。
居間からの声に目を覚ました淳子が、ゆっくりと二階から降りてくる。

託也　父親が父親なら、娘も娘ばい。なんか、あの言い草は？　なんか、あいは？　えぇ？　海帆。
海帆　…すみません。
託也　お義母さんもねぇ、ビールくらい準備しとかんですか？　ええ？
なずな　…けど、ウチ…、ホントに…、動くとも辛くて…。
託也　恥ずかしか。ハッキリ言って、みっともなかですよ。田舎臭か！
夏帆　ここは田舎なんだよ。
託也　…なんか？　夏帆ちゃん。えぇ？　なんか、その目は？
夏帆　…もう、なずなさんだけでも寝かせてやらんね！
託也　偉そうな口ば利いて。えぇ？　おいが居らんなら、どがんもならんやろうが、この家は！

☆　託也、乃理子を蹴る。

夏帆　何すると？！
なずな　託也さん、止めんね！
託也　どがんすっとか？　明日からの通夜と葬式はぁ？
夏帆　明日は「仮」通夜ですけど？

☆　託也、夏帆の顔を掴む。

乃理子　ダ、メ…、か…ほちゃ…、
夏帆　ノリちゃん、向こう行っとき！

託也　夏帆ちゃん、ホラ、お義兄さんとば咥えんや。
夏帆　…結構です。
託也　何てか？　コラ。このアバズレが。
夏帆　間に合ってます。
託也　ホラ、ホラ。夏帆ちゃん、女優さんやろぉ？　ねぇ？
夏帆　そういう女優じゃないです。
なずな　託也さん…、今日は、…止めてくれんね、そがん事は…。
託也　海帆ぉ、お前からも何とか言わんや？　え？　せっかく仕事ば早退してまで来てやったとぞ。
海帆　……。
乃理子　あ…ち、行け…、ば…ぁか…。

☆　乃理子、託也に座布団を投げつける。
託也、乃理子の前に歩いて行く。

なずな　止めて、託也さん！
夏帆　バカ、ヤメロよ！　ノリちゃんに触んな！

☆　止める夏帆を突き飛ばし、託也は乃理子を蹴る。

託也　おいの居らんぎん、どがんすっとかぁ？　えぇ？　この家はぁ？　バカな女ばっかい、雁首揃えとったっちゃあ、どがんしようもなかろうもん！　えぇ？
夏帆　ヤメロ…！　バカ男！
なずな　やめてくれんねぇ、託也さん…！
託也　ホラホラ、このバカ共がぁ！　お前らはなぁ、世の中から舐められとると！　何もしいきらん！
がん田舎に住んで、バカんごと、偉そうな親父にひっついとったお前らは、何も解らんと！

☆　託也、言いながら乃理子から離れ、夏帆に覆い被さる。

夏帆　ヤメロ！　バカ！　ヤメロよ！
なずな　やめんね、…やめて…、人ば呼ぶよ…。

☆　託也、夏帆を組み敷きながら。

託也　誰(だい)が来っとですか？　えぇ？　お義母さん！　こがんとこに！　親父の死んだけんって、誰も来んじゃなかですか！
夏帆　離せ！　イヤだ！　お前、口、臭ぇんだよ！
託也　黙れ、このバカ女！

☆　なずな、立ち上がり電話へ向かう。

託也　なん、しよるとですか？　えぇ？　お義母さん。
なずな　うっ達だって、呼ぼうと思えば、助けに来る人は居るとですよ！
託也　…はっ。誰が、こがんとこに…、

☆　託也が一瞬、身を起こしかけた時、夏帆が託也の腹を蹴る。

託也　うっ。(床に伏せる)

☆　夏帆、急いで託也から離れ、乃理子の所へ行く。

夏帆　…ウチ、もう寝る。…線香の番になったら、起こしに来て！
託也　待たんか、このアバズレ…、
なずな　うん、早う、行き！　ノリちゃんばお願いね。
託也　待たんか！
なずな　人ば呼びますよ！

☆　夏帆、乃理子を連れて、必死で階段へ向かう。
そこには、在りし日の父を託也の姿に映し、腰を抜かしてしまった淳子が座っている。
同じく、父の遺体の横で動けずにいる海帆。託也は標的を海帆に移し、罵りながら蹴り付ける。
なずなの制止の声が響き、場面は変わって行く。

☆　翌日。時刻　一三時四三分
部屋の中央で、託也が大の字になって眠っている。
それを避けるように、海帆が黙々と部屋を片付けている。
なずなと乃理子は開幕時のような恰好で眠っており、淳子は台所へ立っているようだ。
やがて、チャイムが鳴る。
海帆、玄関へ。チャイムの音で起きたらしいなずなが体勢を整える。
そして、膝で眠っている乃理子の頭を撫でる。
台所から心配そうに淳子が現れる。ほどなくして、玄関から海帆と、二女、かのかが現れる。

淳子　かのか。
かのか　久しぶり。（居間を見回す）…ホント、久しぶり…。
なずな　かのかさん、お久しぶり。
かのか　お義母さん、…この度は…。

☆　かのか、床に正座し、なずなに頭を下げる。
不意に現れた青年も、かのかの隣に正座し同様に頭を下げる。

丞清　この度は、ご愁傷様でした。
なずな　あぁ、わざわざ、ありがとう。…ホラ、ノリちゃん、起きんね。
かのか　あ、いいです。お義母さん達は、そのままで。
淳子　大丈夫やった？
かのか　え？
淳子　…大変やったろ？　横須賀から。
かのか　…まぁねぇ。
丞清　あ、あの、（淳子たちを一周見回す。）この度は…。

☆　そう言われて、淳子、海帆は頭を下げる。
丞清の視線は、一瞬大の字の託也へ向けられるが、全員が何となく託也を無いものとして処理する。

かのか　どう？　準備の方は？　今日が仮通夜だってね？
海帆　仮通夜って、通夜と何が違うと？
淳子　ホントならね、今日が通夜で明日が葬式やったとけど、明日が友引ってやんね。
丞清　へぇ。
淳子　あの、そいで、火葬場の開いとらんとって。そいけん、一日ずつ繰り下げてね。
丞清　友引って、ホントにあったんだね。
かのか　そりゃ、あるでしょ。
淳子　ね、舞凜（まりん）ちゃんは？　ウチ、まだ写メしか見た事なかけん、今日、会えるかと思って。
かのか　あぁ、あの子、一昨日から麻疹にかかってね。とても連れて来れなかったから、彼の実家のお義母さんに預けてるの。
淳子　あら、大変かねぇ。
かのか　（淳子に）あ、ちょっと、待って。（丞清に）ホラ、お線香、あげよ？
丞清　うん。
淳子　あ、そうね。

☆　かのか、丞清を誘導して、泰平の前へ。海帆が淳子の元へやって来る。

海帆　腐んないかな？
淳子　え？
海帆　パパ。

淳子　…大丈夫やろ。今日も、ドライアイス、補充してくれらしたけん。
なずな　ごめんねぇ、淳子さん。
淳子　はい？
なずな　ウチがこがん（お腹を擦る）やけん、何もかんも任せっきりでぇ。
淳子　大丈夫ですよ。
かのか　（線香をあげ終わって）だったら、明日来ても良かったかもね。
淳子　そいけん、そがん言うたたい。
かのか　…そうね。
丞清　でもね、こんな時じゃなきゃ、かのかもゆっくり実家に帰れないし、お義父さんの葬儀が終わった後も、しばらく、ゆっくりしてたらって言ってるんですよ。
なずな　…そうねぇ。終わった後のコトなんか、何も考えとらんやったねぇ。
海帆　ウチは、（託也を見る）…終わったらすぐに帰らんばと思う。

☆　携帯電話が鳴り出す。全員が音の発信源を探すが、どうやら託也の傍から鳴っているようだ。
託也、半分寝惚けた状態で携帯を取る。

託也　…は、い…。…えぇ、…あっ！（起き上がる）あぁ、お久しぶりです。

☆　託也、条件反射のようにすくっと立ち上がり、シャキッとした姿勢で話ながら玄関へ。

託也　いえいえいえいえ。えー、そうなんですよぉ。

☆　託也の姿が見えなくなって。

丞清　あの人は？
かのか　…お姉さんの？
淳子　ううん！　ううん！　とんでもない。
海帆　……。（手を挙げる）
かのか　あ、そっか、そっか。アンタ、結婚したって言ってたもんね。
海帆　うん。
かのか　式は挙げなかったんだっけ？
海帆　うん。

☆　居間は沈黙。廊下から、けたたましい託也の声だけが聞こえる。

託也　えぇ、明日が本通夜です。ええ、メモリー会館です。あ、…駅横の。あ、そうですか？
いやぁ、明日が友引で。そうそう。何でしたっけぇ？　いや、…違いますよぉ。アレですよ、
友達を引っ張って行くからですよぉ。部長ぉ、相変わらず、面白いですねェ。
…面白いだって。（言いながら、丞清を従え座る）
かのか　あ、麦茶でいい？
淳子　あ、どうも。
丞清

☆　淳子、台所へ。海帆、行き場がなさそうに立ち尽くす。

かのか　どれどれ。（書類・パンフレットを見る）あら、私たちのお花、コレにしたの？
なずな　あぁ、ねぇ。かのかさんに相談してから、ってことで、夕方、もう一度、葬儀屋さんに注文しようと思っとるとけどぉ。
丞清　お義母さん、が、喪主ですか？
なずな　そいがねぇ、ウチはこがん（お腹を擦る）やけん、今回は淳子さんがって。

☆　託也、けたたましい勢いで戻って来る。

託也　出かけてくる。
海帆　…え？
託也　コッチの支店に顔出してくる。

☆　淳子、二人分の麦茶を持って戻って来る。

海帆　でも、…あ、あの、
託也　やぁ、お義姉さん、参りましたよぉ。コッチの支店の連中が、お通夜に来てくれるって言ってるんですけどねぇ、ちょっと呼び出し食らっちゃってぇ。
淳子　えぇ。大丈夫ですよ。
海帆　でも、いいの？　…お家に居なくて？
淳子　今日は仮通夜やし…。まぁ、ウチらは出て行く訳にはいかんけど、託也さん一人やったら。
託也　あ、タクシー呼んでももらえます？　（海帆に）海帆ちゃん、新しいシャツ、出してくれる？
海帆　あ、…うん。

☆　海帆、慌てて奥の部屋へ走る。

かのか　…あの、託也、さん？
託也　あ、はい。…あっ、あっ、しまったぁ！　すみません、ご挨拶が遅れて。
かのか　こちらこそ、遅くなって申し訳ありません。

☆　託也、服を脱ぎかけた状態で正座する。

かのか　二女のかのかです。
託也　どうも、海帆ちゃんの夫の石清水託也です。
かのか　そして、彼が、
丞清　あ、はじめまして。かのかの夫の…えー、高倉丞清（すけきよ）です。
託也　やぁ、はじめまして。…あ、（サイドバッグから名刺を取り出し）コレ。
丞清　…あ、これは、どうも、ご丁寧に。
託也　ご主人、ご職業は？
丞清　え、あ、あの、

☆　海帆、クリーニングの梱包がしてある白いシャツを持ってくる。

海帆　託也君、あの、シャツの替え、一枚足りないかも…、
託也　え？

☆　託也、立ち上がり、海帆を連れて奥の部屋へ行く。海帆、連れて行かれながら、

海帆　ごめんなさい。計算間違いしてたみたいで。…仮通夜の前の日の事まで考えてなくて、

☆　海帆の声と共に、二人は奥の部屋へ消えて行く。

かのか　…そう言えば、夏帆は？
淳子　ああ、あん子は、脱走したとよ。
かのか　脱走ぉ？
淳子　朝から居らんと。

なずな　んふふ、劇団の稽古があるって言うて、朝からバタバタ出て行ったとよぉ。
かのか　…バカ。こがん時に。
淳子　けどねぇ、正直、こがん伸びると思わんやったけん、実は、結構手持無沙汰さねぇ。

☆　部屋の奥から託也が出てくる。ネクタイを締めながら上着を探す。

託也　やぁ、やっぱり、田舎はいいなぁ。空気も綺麗かし、シャキッとする。

☆　海帆、手に託也のシャツを持って、遅れて奥の部屋から出てくる。

託也　じゃあ、ちょっと行ってきます。夕方には戻りますけん。
一同　行ってらっしゃい。
託也　あ、…タクシーは？
淳子　…呼んでません。
海帆　あ、ちょっと待ってて。

☆　海帆、慌てて電話帳の元へ駆け寄る。

なずな　あぁ、海帆ちゃん。電話のとこに張ってあるよ。タクシーの電話番号。
淳子　ミナサンハイハイ。
一同　え？
淳子　ミナサンハイハイ、よ。三三―八一八一
海帆　え、あ、（固定電話の受話器を取る）さん、さん、の…、
なずな　すごかねぇ、淳子さん。
託也　普通、語路合わせされてますもんねぇ。ホラ、一般的じゃなかですか。葬儀屋は四九四九が多かでしょ？
丞清　あ、なるほど。「シクシク」ね。
託也　この語路合わせは、ウマくやれば、相当な宣伝効果があるとですよぉ。
海帆　すぐ来るって。
託也　お義姉さんがタクシーの番号を覚えてたみたいにね、こんな時に、すごく効果があるとです。
淳子　違うと。ここに来るときに乗ったタクシーの運転手さんが、何回も連呼さすけん覚えたと。
託也　僕は数字に強かとですよ。数字はねぇ、もう、文字に見えるとです。いや、もう、数字の羅列が、一回分散して、もう一回並び直って、そいで、パーッとねぇ、解るとです。答が「五五」って言うとがですね。

☆　その場に居る全員（乃理子、海帆を覗く）託也の視線を追い、何が「五五」なのかを探す。

託也　どこまで行っても無限ですもんねぇ。あ、あれ、見ました？　「容疑者Ｘの献身」　あの中に出てくる、数学者の石神って男。僕ね、アレ、すぐ、トリック解りました。こう言っちゃあナンですけど、解るんですよぉ。解ってしまうんです。

☆　外からタクシーのクラクション。

託也　あ、タクシー。…じゃあ、行ってきます。
一同　行ってらっしゃい。
託也　（行きかけて戻る）あ、証明するために、すれ違う車のナンバー、全部覚えて来ますよ。
　　じゃあ！　（ウィンクして去る）

☆　しばらくして、淳子、堪えきれず吹き出す。

かのか　ちょっ、もぉ、笑わんと！
淳子　あははは。何、アレ？
丞清　五五って、何でしょうね？
なずな　この辺（居間と台所の境目を指差す）ば見て言いよらしたねぇ、「五五」って。
淳子　「五五」って、全然、無限じゃなかたい。あははは。
かのか　あははは。
丞清　や、って言うか、俺、相当、ためて自己紹介したんすよ？　「高倉丞清」ですって。ツッコミどころ満載でしょ？　スルーっすよ？
淳子　あははは、丞清！
かのか　そうさ。この人（丞清）来る間中、自己紹介するの、楽しみにしてたのにぃ。
丞清　「高倉と言ったら、健やろう」か「犬神家の一族かい」くらいのツッコミ、マジ、期待してましたよ。
かのか　いやぁ、参った、参った。
淳子　トリック、…むははは、解っちゃったんだって。
なずな　あは、あはは、ちょっと、…止めてぇ、笑わせんでぇ。
海帆　笑わんで！

☆　海帆、シャツを床に叩きつける。

海帆　…笑うなんか、どがんかしとる！　笑わんで！　笑いごとじゃなかと！
淳子　あ、ごめ…、
海帆　笑わんでよ！　何もおかしゅうなかたい！　何で笑うと！
かのか　ごめんって、海帆…。
海帆　ウチ、ちょっとクリーニング屋さんに行って来る！
淳子　え？
海帆　ウチは…、どうせ、何も解っとらんよ。（指を折りながら）仮通夜、本通夜、葬式…、って、答えは「三」やろう？　じゃあ、シャツ、三枚で足りるやろう？
なずな　…あ、海帆ちゃん、あのねぇ、仮通夜は…そがん、正装じゃなくても良かとよ。この辺は田舎やけん、本通夜の時も、ねぇ？　そがん、キチッとした恰好せんでも。
淳子　そうさ。別に、いつも喪服ば着らんばって訳じゃなかとやけん。
海帆　全部…、間違っとる。下着も、靴下も、全部、数え間違うとる…。（泣く）
淳子　した、下着って、ホラ、コンビニにも売ってあるたい？
海帆　…ホントは、託也君が数え間違っとると！　「友引は盲点やった」って…、友引は盲点やったって…！
かのか　落ち着いて、海帆！　ね？　シャツなら、どこでも買えるでしょ？

☆　騒ぎの中、なずながお腹を押さえている。

淳子　じゃあ、…ホラ、新しかシャツとか、買いに行って来る？　ここにはうっ達が残っとくけん、…ねぇ？　ちょっとくらい、海帆が抜けても、
かのか　うん。大丈夫よ。行っておいで。

☆　乃理子、ゆっくりゆっくりと海帆に近付き、海帆を抱き締める。

海帆　ノリちゃん…。
乃理子　…お、…かさ…、が。（なずなを指差す）

☆　全員、なずなを見る。

淳子　え、どがんしたと？

かのか　なずなさん？
なずな　あ、…何でんなかとよ。…あの、ちょっと、…ね、お腹が…。
淳子　お腹！
かのか　大変じゃない！　救急車！　（丞清に）アンタ、救急車！
丞清　あ、う、（立ち上がり、右往左往する）
なずな　ま…って、あの…かかりつけの、お医者さん…、すぐ、…車で十分くらいやけん…。
淳子　え、どこ？　じゃあ、タクシーで行く？　タクシー…ミナサンハイハイ！
海帆　あ、じゃあ、ウチ、車で連れて行くけん！
かのか　え、アンタ、運転できるの？
海帆　うん。車、夏帆が置いて行ってくれとるやろ？
淳子　うん。そいぎん、なずなさん、立てる？
かのか　（丞清に）ホラ、アンタ！　手ぇ、貸して！
丞清　うん。

☆　丞清、なずなの傍に座り込み、なずなの体を支える。
海帆は車の鍵をテーブルから取り、シャツを持って玄関へ向かう。

なずな　あたたた。
淳子　え？　臨月じゃなかとでしょ？
かのか　心労が祟ったんじゃない？　あの人が死んだワケだし。
なずな　や…、…さっき、…笑ったけんかもしれん…。
丞清　……「五五」
なずな　んふふふ。
かのか　バカ、やめてよ！　笑わせてどうするの！
丞清　ごめん！

☆　庭では、夏帆の車のエンジンがかかったらしく、邦楽が大音量で流れる。
娘たちの励ましが音楽に消され、丞清は歌を口ずさんでいる。
なずな、丞清、淳子、かのかが共に玄関へ去り、乃理子は一人残される。

乃理子　シッカリしなさい。娘たちが見よるでしょう。窓を開けて、ホラ、立って。ちゃんとご飯作って、ね？　淳子ちゃんもかのかちゃんも、シッカリした良か子たい。泰平ちゃんの浮気なんか、数え上げたらキリんなかと。そがん事よりも、ちゃんと娘さん達ば育てていかんば。ウチが協力する。ね？　ウチが、この家ば変えてみせるけん。頑張れ、やい子さん。頑張れ！　淳子ちゃん、かのかちゃん！

☆　しかし、乃理子の語りは夏帆の車から聞こえる曲にかき消される。
やがて遠のいていく音楽と共に、乃理子はいつも通りの乃理子へ戻る。
そして、ゆっくりと泰平に抱き着く。かのかと丞清が戻って来る。

丞清　早産？
かのか　解らないけど、もしかして、帝王切開で赤ちゃんを取り出すってこともあるかも。
丞清　ええ？　そうなったら、大変じゃん？
かのか　…コラ、乃理子！　何してんの！？

☆　かのか、乃理子に走り寄り、乃理子を泰平から引き離す。

かのか　ダメ！　これは死体なんだから、触っちゃダメなの！
乃理子　お、…とさん、寝て…の？
丞清　…なんだか…、アレだね？

かのか　何？
丞清　想像以上に、…飛び出してくるね。
かのか　何が言いたいの？
丞清　あ、ううん。…何でも。
かのか　…私、…ちょっと、眠って来てもいいかな？
丞清　え？　あ、うん。…え？　でも、誰か来たら、どうすればいい？
かのか　きっと…誰も来ないと思う。…でも、真理子さんが来たら教えて。
丞清　…誰？
かのか　真理子さん。この子（乃理子）のお母さん。
丞清　俺、顔、解んないよ。
かのか　私も解んない。覚えてないもん。
丞清　…でも、俺、一人で心細いよお。
かのか　大丈夫。ホント、誰も来ないから。
丞清　う、うん。
かのか　仮通夜って、家族だけで過ごすんでしょ？
丞清　そうだけどさ、知らない人も居るかもしんないよ？　ホラ、近所の人とか。
かのか　…残ってる家族は、真理子さんだけだから。
丞清　……うん。解った。

☆　かのか、自分の旅行バッグを持って二階へ。

丞清　ね、乃理子、ちゃん？　君は、お母さんの顔、覚えてる？

☆　乃理子、丞清の言葉には答えず、ゆっくりとかのかを追う。

乃理子　か…かちゃん…、鬼…ご…っこ…。

☆　丞清、一人取り残される。思い立ったように泰平の前へ座り線香をあげる。
それとほぼ同時に、夏帆が玄関から入ってくる。

丞清　（合掌して）南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。
夏帆　……みんなは？
丞清　……。（夏帆を見る）
夏帆　あれ？　姉たちは、どこですか？
丞清　…っくりしたぁ…。
夏帆　……。
丞清　あ、僕、あの、かのかの夫です。
夏帆　…あ、はい。写真で、見た事あります。
丞清　…あ、すみません。あの、お邪魔してます。
夏帆　いえ、どうぞ。…あのぉ、
丞清　あ、かのかは、今、上で寝てます。あ、乃理子ちゃんも一緒に。
夏帆　そぉですか。
丞清　それでですね、さっき、ちょっと大変だったんですよ。あの、お義母さんがぁ、お腹痛くなっちゃってぇ。それで、えーっと、お義姉さん達が、…えっとぉ、あの、長女の方と、…さん、四…、四女の方、
夏帆　淳子姉さんと海帆ね。
丞清　そう。病院に連れて行きました。
夏帆　…なずなさん、大丈夫かな？
丞清　こんな時、男はダメですね…。
夏帆　え？

丞清　や、なんか、自分、オタオタしちゃってぇ。お義姉さん達は、テキパキしてらっしゃって。
夏帆　……。
丞清　あ、あれ？　俺、何か変なコト…、
夏帆　あ、違うんです。ごめんなさい。…ウチ、今日、稽古で散々叱られて、何か、ちょっとヘコんでるってゆーか…。
丞清　あ、女優さんなんですよねぇ？
夏帆　…女優…って言うほどのものでも、ないんですけどねェ。
丞清　やっぱ、アレですね、何となく、海帆さんに似てらっしゃいますねぇ。いやぁ、もちろん、五人ともキレイですけど、なんていうか…。
夏帆　あぁ、だって、海帆とウチは母親が一緒ですから…。あ、海帆の方がお姉さんなんですけど。
丞清　はいはい。聞いてます。あ、やっぱ、アレですか？　やっぱり、シェークスピアとか、
夏帆　それ、劇団に入ってますって言ったら、みんな、そう言います。
丞清　…あ、は、すみません。俺、お芝居とか、全然、解んなくて…。
夏帆　…さ、じゃあ、…ウチはココで留守番してたらいいのかな？
丞清　そうみたいです。…あ、俺も、留守番です。
夏帆　…ナンか、長いですよねぇ。早く終わらせたいのに…。（持っていたペットボトルのお茶を飲む）
丞清　パパも、ずーっと、ああだし。
夏帆　…どんな…お父さんでしたか？
丞清　…どんな…。
夏帆　あ、や、ホラ、通夜の時って、ねぇ？　故人の話をした方が、…なんか、なんかイイって言いません？
丞清　…ふ、「ナンかイイ」んだ？
夏帆　まぁ、「ナンか」イイ感じになるんすよ、多分。
丞清　あ、そうだ。ウチ、あの、五女の夏帆です。
夏帆　あ、あぁ、そうですね。あの、俺は……「高倉…」
丞清　犬神家の人ですよね？
夏帆　あぁん、言わせて。最後まで言わせて。
丞清　やっぱり、アレですか？　…ご両親も、「犬神家の一族」を観て、お名前をつけられたんですか？
夏帆　…わっかんないっす。俺、それ、ホント、マジで聞きたいですよ。正気か？ってカンジでしょ？
丞清　いいじゃないですか。絶対忘れられませんよ、その名前。
夏帆　ってか、名乗った瞬間、出オチみたいな感じでね。結構、後が続かないパターン、多いッスよ。
丞清　…ですよね。
夏帆　えぇ。
丞清　だって、初対面の人って、何喋っていいか、解りませんもんね。
夏帆　……ね。
丞清　…ウチらも初対面ですもんね。
夏帆　そうですね。
丞清　……。
夏帆　…最大のオチも使ってしまったしね…。
丞清　ふ…。あ、…じゃあ、お芝居の稽古、付き合って下さい。
夏帆　えぇ？　ムリムリムリ。
丞清　や、大丈夫。（バッグからボロボロの台本を出す）そんな難しくないです。ウチ、今日、散々
夏帆　がられたけん、マジ、悔しくて。次の稽古までに、絶対、クリアして行きたいんです。
丞清　がられ、
夏帆　（台本をめくる）あ、ココです。ウチ。セリフは入ってますから。
丞清　（台本を受け取って）…俺、どれです？
夏帆　『王子』の役です。王子様。
丞清　マジ、棒読みですよ？
夏帆　大丈夫。じゃあ、…その頁の頭から行きます。
丞清　えぇぇ。（台本も食い入るように見る）

夏帆　…ナンか、…セリフがあった方が安心するんですよねぇ。
丞清　…安心ですか？
夏帆　初対面でも、ホラ、間が持つじゃないですか。自分で言葉考えなくていいから。
丞清　は、なるほど。
夏帆　『王子、引っかかったなぁ』
丞清　…あ、もう、始まったんですか？　えー、『お前、オデット姫じゃあらへんな？』え、関西弁？でイイんですか？
夏帆　余計なコト、言わないで下さい。『王子、引っかかったなぁ』
丞清　『お前、オデット姫じゃあらへんな？』（言いながら、首を傾げる）
夏帆　『せやで、せやでぇ。ウチはあんさんを誘惑する、悪い、あ、わぁるぅいヤツなんやでぇ』
丞清　『いかん！　下半身、ビンビン、反応してもうてる！』
夏帆　『ホレ、ホレホレホレ、もう、ビンビンやぁ』
丞清　『ああん、ああん、やめてぇ』　…ちょっと、タンマ。
夏帆　なんっすか？
丞清　どゆこと？
夏帆　ぶっ。何が？
丞清　コレ、どゆこと？
夏帆　「白鳥の湖」ですよぉ。
丞清　ううん。俺の知ってる「白鳥の湖」は、こんなんじゃない。
夏帆　衣装でね（笑）、ジークフリート王子は、股間に白鳥付けてんの（笑）
丞清　シモじゃん。
夏帆　だよ？　ウチの劇団、こんなカンジ。
丞清　コレ、大丈夫？　バレェやってる人から怒られない？　なんか、「白鳥の湖」関係者からさ。
夏帆　ちょっと、ね、お願い。続きやろう？　ウチ、マジで稽古したかっちゃけん。
丞清　初心者には高いハードルだって。

☆　丞清は渋るが、夏帆の睨みに遭い、また渋々台本を持ち直す。

夏帆　んじゃ、さっきの王子のセリフから。
丞清　え～…、あ、う、ううん。（咳払い）　『ああん、ああん、やめてぇ。そこはいっちゃん、弱いとこやねん』
夏帆　『ほな、じぃっくり責めさせていただくわぁ。ホレ、チョン。』
丞清　『いやぁん』
夏帆　『ココは、どや？　ホレ、チョン。』
丞清　『すっごぉい』
夏帆　『ホレホレ』
丞清　『あ、待ってぇ、苛めんといてぇ、堪忍やわぁ』　…ちょっと、タンマ。
夏帆　『イヤやイヤや言うてもぉ、あんさん、破裂しそうやでぇ』

☆　言いながら、夏帆、丞清の膝に乗っかって行く。

丞清　…えっとぉ…、『いやぁん、焦らさんといてぇ、ウチ、悪い子になってしまいそうやぁ』
夏帆　『もっと、もっとやでぇ。ホレ、チョン』

☆　夏帆と丞清の顔が、段々近付いて行く。

夏帆　『どや？　えぇやろぉ？』
丞清　『あああ、堪忍してぇ』
夏帆　『降参…』（丞清の台本を取り上げる。）降参するか？
丞清　…しちゃうかも…。

夏帆　丞清ちゃんも、ビンビンやでぇ。
丞清　（股間を押さえながら）ビンビンやでぇ…。

☆　夏帆、丞清の膝から降りる。

夏帆　ね、…やって見せて？
丞清　え？
夏帆　一人で、やってみぃ。
丞清　それは、あきまへんでぇ。
夏帆　なやてぇ？　ホレ、チョン。
丞清　ああん。

☆　丞清は急いでジーパンと下着を降ろす。

夏帆　ホレ、ホレホレ。やって見せんかい。
丞清　ちょ…、マジ？
夏帆　見たいんやでぇ。
丞清　…ちょっとだけやでぇ。

☆　丞清、言いながら自分のモノを扱く。

夏帆　気持ちええかぁ？
丞清　…夏帆ちゃんが触ってくれたら、もっとええなぁ。
夏帆　写メ撮ってええか？
丞清　あ、アカン、それは、アカン。
夏帆　…何考えてる？
丞清　…ええ？
夏帆　何考えて、やってはります？　王子様。
丞清　何て…、そりゃ…、夏帆ちゃんの…夏帆ちゃんの…乳やでぇ…。
夏帆　あ、やんらしい。
丞清　夏帆ちゃん、触って…。
夏帆　…昔なぁ、ある男が、寝てるウチの所にやって来てなぁ、
丞清　えぇ？　なんやてぇ？
夏帆　『夏帆、触れ～』　『触れ』って言うんや。
丞清　…夏帆ちゃん…。
夏帆　何やろな？　オトコって、ナンか、境界線、まちごうてへん？
丞清　…どーしたんや、夏帆ちゃん…。
夏帆　（丞清の手元を覗き込む）なんや、シッカリやらんかい。
丞清　なぁ、夏帆ちゃん。ちょっとでええから、触ってやぁ。
夏帆　自分でやらんね。そがん、触れの舐めろの言わんで、自分でやらんね。

☆　夏帆、立ち上がる。

夏帆　そがんモンの為に、ウチの体はあるっちゃなかと。

☆　二階からかのかが降りてくる。一階の様子を伺いながら途中で止まる。

夏帆　…ウチ、部屋に戻るけん。
丞清　やっ、アカン。ちょっ、堪忍やでぇ。

☆　夏帆が階段の方を向くと、階段途中で立っているかのかと目が合う。
二人はしばらく見詰めあっており、丞清だけが、必死にマスターベーションを行っている。

夏帆　　…久しぶり、かのか姉さん。

☆　夏帆の言葉に、丞清が階段の方を見る。

夏帆　　…芝居の稽古してたの。
かのか　　……。
夏帆　　丞清さんに、手伝ってもらってたの。
丞清　　あ…、ああ…、アカン…。
夏帆　　丞清さん、ごめんね？　付き合ってくれて。助かりました。
かのか　　何がお芝居よ！

☆　かのか、階段から駆け下り、夏帆に掴みかかる。

夏帆　　やー、やめてよぉ！
かのか　　何してんのよ、アンタ！
夏帆　　何もしとらん！　ウチ、何もしとらんよ！
かのか　　人の旦那に、ちょっかいかけるっちゃなか！
夏帆　　ちょっかいなんかかけとらん！　芝居の稽古ばしよっただけやもん！
かのか　　なん、何言いよると…！　ちったぁ、マシなウソば吐け！
夏帆　　嘘なんか吐いとらん！

☆　乃理子もゆっくりと階段を降りてくる。
そうして、かのかが立ち尽くしていた場所と同じところに立つ。

丞清　　ま、待って、待って、かのか。
かのか　　アンタは、早う、そいば仕舞いなさい！
丞清　　ああ、…だってぇ…。

☆　邦楽が段々近付いてきて、やがて大音量になる。庭に夏帆の車が戻ったようだ。
しかし、かのかは夏帆に掴みかかるのを止めない。

かのか　　アンタんごたん女！　アンタんごたんとは、いっちょん好かん！
夏帆　　やめてよぉ！
かのか　　人の旦那に手ぇ出して、何が楽しかと？！

☆　曲が止まる。

かのか　　何とか言わんね！

☆　丞清、何とかジーパンを穿きかのかを押さえる。

丞清　　違う、違うって、かのか！
かのか　　何が違うとね！
丞清　　ホント、俺ら、何もしてないって！
かのか　　何ば言いよると？！　下半身丸出しやったくせに！
丞清　　や！　違うんだって！　お芝居の稽古をしていたら…、俺、や、役に入り過ぎちゃって。
かのか　　こん子はねぇ、母親にソックリさ！

夏帆　何ね！
かのか　アンタは、母親ソックリって言うたとさ！　男にだらしんなくて、
夏帆　違うさ！　姉さんに魅力のなかけん、丞清がフラフラするっさ！
かのか　何てね！

☆　騒ぎを聞きつけ、淳子と海帆が飛び込んで来る。

淳子　何しよると！
丞清　あ、お義姉さん！
かのか　こん子が！　ウチの旦那ばたぶらかして！
夏帆　たぶらかしとらん！
丞清　すみません！　俺、…俺、芝居の稽古してたんですけど！
淳子　ちょ、もぉ！　やめんね！

☆　淳子、二人に駆け寄りかのかを押さえる。

かのか　離して！　離して！

☆　海帆、夏帆を押さえる。

海帆　ちょっと！　落ち着いて！　喧嘩せんで！
淳子　アンタ、丞清君にチョッカイ出したとね？
夏帆　だけん、芝居の稽古って言いよるたい！

☆　夏帆、海帆の手を振り切って階段へ走る。

夏帆　そがん心配かとなら、鎖に繋いどかんね！

☆　夏帆の前に乃理子が立ちはだかっている。夏帆は乃理子を避け、二階へ去って行く。

かのか　待たんね！　夏帆！
淳子　かのか！　落ち着いて！
かのか　落ち着いて？　落ち着いてじゃなか！
丞清　でも、ホントに、何にもなかったんです！　すみません！
かのか　じゃあ、何で、…何で、アンタ、あがん恰好しとったと？！
丞清　…や、あの、…それは、…あわよくば、…夏帆ちゃんと…やりたいと思って。
かのか　すーけーきーよー！！
丞清　ごめんなさい！
かのか　アンタ、バカじゃなかと？　何で、そがんだらしなかと？　何回やれば気の済むと？！
淳子　…何ね、丞清君、そがんしょっちゅう…？
かのか　浮気の常習犯さ！　ウチが大人しかと思うて！！
丞清　や、…全然、かのかは大人しくないよ。
かのか　何てね！
丞清　や、うん！　ホントに、全面的に俺が悪いよね！
海帆　最低。
丞清　…や、…あの、だってぇ…。
かのか　そがんだらしんなか下半身やけん、すぐ付け込まれるっさ！　もう、ウチは次は許さんって言うたよねぇ？！　そいも！　よりによって、ウチの妹と！！
淳子　ちょっ、かのか！
海帆　よぅ、あそこに死体のあるとに、そがん気になるよねぇ？

かのか　そいけん、イヤやったとさ！　アンタも夏帆も、母親のだらしなかけん！
淳子　かのか！
かのか　よそわしか！　男と見れば、見境なかっちゃっけん！
海帆　何ね、そい！　ママとウチらは関係なかやろ！
かのか　あるさ！　そがんとはね、遺伝するっさ！　アンタ達は、生まれついてそがんあると！
淳子　ダメって！　かのか！
海帆　じゃあ、何ね？　姉さん達のママはどがんやったと？　浮気されまくってんのも遺伝じゃなかとね！

☆　海帆も階段へ向かう。

かのか　何てね！
淳子　かのか！　やめんね！　丞清！　止めんね！　早う！
丞清　あ、はい！　（階段へ向かう）
淳子　バカ！　違う！　かのかば止めんね！
丞清　あ、はい！　（かのかと淳子の所へ走り寄る）

☆　海帆の前に乃理子が立ちはだかっている。海帆は乃理子を避け、二階へ去って行く。

かのか　待たんね！
淳子　お願い！　落ち着いて！
丞清　そうだよ、かのか！
かのか　すーけーきーよー！　元はと言えば、アンタのせいやろうが！
丞清　そう！　そう！　悪いのは俺！　俺だから！　だから、姉妹喧嘩はやめて！
淳子　そうばい！　とにかく、落ち着いて話そうで！
かのか　うわーん！

☆　かのか、突然泣きはじめる。

淳子　…かのか…。
かのか　どうせ…、ウチなんか…。
丞清　かのか！
かのか　誰ともウマく行かん。舞凜とも、アンタ（丞清）のお義母さんとも…！　ウチが悪かっさ！
浮気される方が悪かっさ！
丞清　違う！　違うよ、かのか！　かのかはよくやってるよ。ね？
淳子　アンタが言えた義理ね！
丞清　そ、そうっすけど、でも、ホントにかのかはよくやってくれているんです！
淳子　…そ、…そいなら、何で浮気するとね？
かのか　もう、ウチに魅力なんかなかとさ…。丞清はロリコンやもん。
丞清　違うよ？！
淳子　ロリコンね！
丞清　違います！　ロリコンじゃなくて、…その、誘われたら…断れない性質なんです！
淳子　……。

☆　かのか、床に崩れる。丞清は必死でかのかを支える。

丞清　ごめんね、俺、バカだから、いつもかのかにイヤな思いさせて。
淳子　…アンタ、最低ね。
丞清　そうなんです。俺、最低なんです。
かのか　…ウチ、…もう、出てく。

淳子　え？
かのか　ココに居りとうなか。出てく。横須賀の家も出てく。…もう、一人になる。
淳子　かのか…、
丞清　ヤダよ！　かのかが出て行くなんて、俺、ヤダよ！
かのか　っるさい！　バカ！　バァカ！
丞清　かのか！
かのか　もう、アンタの顔見ると、イヤになったと！　ううん、その、浮気がバレた時に平謝りするだけで、なーんも反省せん、アンタの、そのバカ面ば見るとに、もうウンザリしとると！　そいで、懲りもせず、すぐに浮気する！　浮気して隠す頭もなか！　そいとにお義母さんは、アンタの事は棚に上げてさ、ウチの子育てが悪か、悪かって言うて、ウチがおかしかごとばっかい言わす！　…舞凜ば返して貰わんば！　ウチ、舞凜ば連れて、…どっか遠くに行く！
丞清　そんな…、ヤダよ。…かのかが出て行くぐらいなら…！

☆　丞清、立ち上がり、玄関へ走り去る。

丞清　俺が出て行く！！
淳子　あ、ちょっと！　ちょ…っ！

☆　淳子、慌てて丞清を追いかける。

淳子（声のみ）　何考えとるとね、アンタ！　戻んなさい！
丞清（声のみ）　俺が居ない方がいいんです！
淳子（声のみ）　何言いよると？　アンタがしでかしたことやろうもん！
丞清（声のみ）　すみません！　お義姉さん！！
淳子（声のみ）　待たんね！　待たんね！　すーけーきーよー！！
乃理子　かのかちゃん…。
かのか　……。（階段を見る）
乃理子　ホラ、見て？　ココに芽の出とるやろ？　こいはねぇ、今から葉っぱになって、蔓の伸びて、支柱に巻き付いて行ってね、どんどん伸びて、蔓がどんどん合わさって、大きくなって、そいで綺麗か花の咲くとよ。見たことあるね？　朝顔の花ばい。淳子姉ちゃんと、かのかちゃんとウチで、ちゃんと育てて行こうね。ホラ、もう、泣かんと。ね？　なんでも、ゆっくりゆっくりばい。かのかちゃん、一人で頑張り過ぎるけん、ね？　忘れんでね。ゆっくり、ゆっくりばい。
かのか　……。

☆　かのか、いつの間にか立ち上がっており、階段の乃理子と向かい合う。

乃理子　…か…かちゃ、泣い…ちゃ、ダ、メ…。
かのか　…真理子さん？

☆　淳子が戻って来る。

淳子　ダメ。すごい勢いで走り去って行ったよ。丞清君は。
かのか　…そ。
淳子　…何ね？　ウマく行きよらんと？
かのか　…だって、こがん家やもん。どがんしたら、…良か奥さんになるとか…、良かお母さんになるとか、…ウチ…解らんもん。
淳子　……。
かのか　ウチのね、することなすこと、向こうのお義母さんは、気に入らっさんごたん。
淳子　向こうって、…丞清君の？

かのか　……。（頷く）
淳子　…言うほど、丞清君も大層な躾ば受けとらんと思うけどね。
かのか　…ああいうのって、躾と違うとかも。
淳子　浮気？　…そうね。そこまでは親も躾けんやろうしね。
かのか　…姉さん。真理子さん、来た？
淳子　え？
かのか　覚えとらん？　真理子さん。
淳子　…覚えとるよ。
かのか　ウチ、…こがん家、帰って来たくなかったけど…、もしかしたら真理子さんの戻って来るかもしれんって思いよった。
淳子　…うん。

かのか　真理子さん、…あの人（泰平）の従姉（いとこ）やったとよね？
淳子　そう、やったね。
かのか　ウチ、思うとけど、…あん子（乃理子）の父親って、あの人（泰平）じゃなかっちゃなかかな？
淳子　…うん。
かのか　え？　姉さん、知っとったと？
淳子　だって…真理子さん、うちに二番目の奥さんとして来た時には、もう乃理子がお腹に居ったし、ウチ、真理子さんに直接聞いたコトあるし。
かのか　…いいなぁ。

☆　かのか、乃理子に手招きする。乃理子、嬉しそうに歩いて来る。

かのか　こん子は、あの人と血の繋がっとらんとばいね。
淳子　夏帆もね。
かのか　…あいは、そがん問題じゃなか。母親の方にも問題だらけやったたい。
淳子　ウチ、十七年ぶりに海帆と夏帆に会うたけど…、何か…、あの二人、全然、ウチらに似とらんね。そりゃ、夏帆はウチらと全く血の繋がっとらんけん…アレやけど。
かのか　何か、子供ん頃から、おかしかおかしかって思いよったけど…、ホント、この家おかしかよね。
淳子　…ふふふ。
かのか　…なん？
淳子　や、ホントにね、と思うて。揚句、ウチらより年下の継母まで居るとよ。
かのか　…あぁ、よそわしか。早う終わらんかね。

☆　乃理子、淳子とかのかの元へやって来て、二人の手を取る。

淳子　…どがんしてしもうたとやろうか？
かのか　え？
淳子　こん子も、…海帆も、夏帆も…。…海帆は、何であがん男と結婚したと？　そいに、アンタ、乃理子がこがんなっとるって、知っとったと？
かのか　海帆は…単に男の趣味の悪かだけやろうけど、…乃理子の事は、偶然知ったとよ。去年、ウチ、家出してね。
淳子　家出？
かのか　…旦那の浮気。…バカやね。舞凜ば連れてね。…結局、どこに行くっても…宛のなくてね。…ううん、何か知らんけど、自然とこの家に足の向いたと。ビックリしたよ、自分でも。『あぁ、ウチは、この家のコトば「実家」って思っとるとねぇ』って。そしたら、こん子はこがんなっとるし、新しかお義母さんは居るし、海帆はいつの間にか結婚して出て行っとるし、あの人は…、あん人だけが、…年も取らんで…、何も変わっとらんやった。ウチ、ゾッとしたとよ。この人は、永遠に生き続けるっちゃなかかって。そう思ったら、…何て言うか…、ものすごい脱力感が襲って来たと。どがん抗ったっちゃ、ウチは、…もう、取り返しの付かんっちゃなかや

ろうかって…。

☆　夏帆と海帆、二階から階段へ歩いて来る。

かのか　もしかして…舞凜に悪いものが遺伝してしもうたかもしれん。怖くて怖くて…、
夏帆　淳子姉さんが居なくなって、かのか姉さんも居なくなって、

☆　淳子とかのか、階段を見る。

海帆　ウチ達は必死やった。うっ達三人は、必死で生きてきた。
夏帆　ウチは、パパとは血が繋がっとらんやった。そがん言うて、ウチが中学生の時、パパがいきなり、夜、部屋に来て…。
海帆　怖かった。ウチは隣に寝とったけど、パパは、急に…鬼のごとなって…。
夏帆　『お前は、お前の母親に似とる』って。『男好きなところまで、母親にソックリだ』って。
海帆　『夏帆は…パパの娘じゃなかとやけん、特別に扱わんばと』って…。
夏帆　誰の子か解らん子は、恐ろしゅうて置いとかれんって。ウチ、怖くて怖くて…。
海帆　ウチは、夏帆ば連れて、逃げたと。…淳子姉さんの部屋に…。
夏帆　パパが家に居る時は、ずっと、海帆とノリちゃんと、あの部屋に閉じ籠った。
海帆　…パパは…鬼やった。
夏帆　…よその男と悪さばするくらいなら、パパの言う事ば聞けって…。

☆　淳子とかのか、二人の言葉を聞きながら手を取り合う。

夏帆　…ごめんね、かのか姉さん。…ウチ、…別にちょっかいかけたワケじゃなかったと。セリフがあれば、…ウチ、安心するっちゃん。…もし、こがん呪われたコトが、ウチの運命なら…、何回も…パパの言う通りにしようと思った…。けど、…そいはできんかった。だけん、ウチは海帆と一緒にママの所に逃げたっちゃん。
海帆　…けど、ママも…。結局、助けてくれんかった。
夏帆　ママは…お金の為に、うっ達ば売らしたと。
海帆　かのか姉さんの言う通り。
夏帆　ウチらは、…根っこから腐っとるっちゃん。

☆　夏帆と海帆が階段を降りてくる。そこへ自宅の電話が鳴る。
一同、動きを止める。やがて淳子が電話へ歩み寄る。

淳子　もしもし？　…はい？　…はい？　…は？　え？　…里村？　里村、さん、ですか？

☆　淳子の言葉に全員が淳子を見る。

泰平（声のみ）　あぁ、恨めしか…。憎らしか…。お前は、何でそがん強情かとか…。誰もおいの思う通りにならん。あぁ、くそ。

☆　時刻は、やがて夜へと移って行く。淳子は電話を切り、五人は黙々と線香の番をする。
主が去った勝磯家を、誰も訪ねてくることはなかった。

☆　時刻　午前０時九分。
淳子、居間に座り写真を見ている。その下で、淳子の膝枕で乃理子が眠っている。
そして、こっそりこっそりと丞清が戻って来る。

丞清　あ、

淳子　…お帰りなさい。
丞清　あ、…はい。
淳子　どこ行ってたの？
丞清　…あ、あぁ、近くのパチンコ屋に。…あの、あの後、タクシーを呼んで…、パチンコ屋に行きました。
淳子　タクシー？
丞清　ミナサンハイハイです。
淳子　……。
丞清　あ、あの、コレ。（手に持っている袋を掲げる）景品…なんっすけど…。
淳子　…あ、そ。
丞清　ホントに、今日は、すみませんでした。（頭を下げる）
淳子　…反省してんの？
丞清　してます！

☆　淳子、丞清に向かって『シーッ』とジェスチャー。

丞清　あ、すんません。
淳子　あの子たち、みんな上で寝とるけん。
丞清　はい。…お義母さんは？
淳子　…あぁ、まだ、…病院。
丞清　大丈夫だったんですか？　なんか、俺のせいでバタバタして…。
淳子　大丈夫のごたんよ。家では落ち着かんけん、一晩だけ入院させてもろうたと。
丞清　あ、…そうですか…。

☆　沈黙。丞清、どうしてよいか解らずに立ち尽くす。

淳子　…座れば？　そいとも、寝る？　上はあん子達の居るけん、丞清君は下ね。
丞清　や、…僕は…、何か…、お手伝いすることありますか？
淳子　なかよ。こがん夜中に…。
丞清　…そうですよね。
淳子　線香番でもしてくれれば…。あ、じゃあ、ちょっと、写真の整理、手伝ってくれる？
丞清　あ、はい。

☆　丞清、嬉々として淳子の隣に座る。

淳子　言っとくけど、こいば手伝ったけんって、昼間の事は帳消しにはならんばい。
丞清　…あ、はい。
淳子　って言うてもね。…まぁ、こいばっかいは、夫婦の問題やけどね。
丞清　……ホント、すみません。
淳子　あんだけ怒らせるとやけん、いい加減、懲りて、浮気やめれば？
丞清　や、もちろん、そうなんですけどね…。…俺、…実は、かのかに怒られるの、大好きなんです。
淳子　はぁ？
丞清　あ、…やっぱ、引きますよね？
淳子　引くって言うか…、うん。引く。
丞清　変でしょう？　俺、変なんですよねぇ。
淳子　だからって、浮気していいって基準になりますかね？　何、それ？　丞清基準？
丞清　もちろんですよ。浮気していいって言い訳じゃなくて、ホントに、かのかに怒られて罵られて、大騒ぎして、元鞘に戻んのが…好きなんです。
淳子　……。
丞清　あ、コレ、かのかにはナイショにして下さいね？

淳子　言わんけど。
丞清　あ、…コレ、お義姉さん、ですか？

☆　丞清、写真を淳子に差し出す。

淳子　（写真を覗いて）あぁ、そうね。この横んとがウチの母で、抱っこしとるとがかのかたい。
丞清　へぇ、これがかのかかぁ。…かのか、昔の写真、全然見せてくれないんですよ。
淳子　見せたか写真もなかとよ。…あ、ウチ、ホラ、普通の家じゃなかけん。
丞清　えー？　普通ですよぉ。お義父さんが三回再婚なさっただけでしょう？
淳子　四回。
丞清　あ、…そっか。でも、バツ三なんて、全然、フツーですよぉ。
淳子　……。
丞清　……あ、や、まぁ、そりゃ、細かい事は解りませんけどぉ。
淳子　あ、こいが、…三人目の…、あの、海帆と夏帆の母親。

☆　淳子、丞清に写真を差し出す。

丞清　おぉ。女優さんみたいですねぇ。…あ、なるほど。海帆ちゃんも夏帆ちゃんも、お母さんに似てるんですねぇ。
淳子　そう、ね。確かに、何か…華やかな…うんにゃ、派手な女やったね。
丞清　ははは。
淳子　ん？
丞清　…や、やっぱ、血が繋がってないと、親子って感じじゃないでしょう？　笑うつもりはなかったんですけど、お義姉さん、今、メッチャ、ヤな顔してましたよぉ。
淳子　あぁ、…ウチ、この三番目のお母さんに、良か思い出、なかっちゃん。
丞清　なるほどですねぇ。…あと、真理子さんの写真、ないんですか？
淳子　え？
丞清　や、乃理子ちゃんのお母さんですよね？　今日、かのかから聞いたんです。
淳子　真理子さんはねぇ、そがん長い間、居らっさんやったけん。写真、撮る暇のなかったっちゃん。
丞清　…何かね、一番短いお母さんやったけど、ウチとかのかは、…一番好きなお母さんやった。
淳子　へぇ、そうなんですかぁ。
丞清　…だけん、…あんまりねぇ、血の繋がりって、重要じゃなかとよ、この家。
淳子　…俺の母親はですね、…陰険なんですよ。
丞清　…え？
淳子　昔ね、…多分、俺の親父も、相当浮気してたと思うんす。ホラ、何となく解るじゃないですか、そういうの。
丞清　…まぁね。
淳子　おふくろも、言いたいことがあったら、言えば良かったと思うんすよ。…でもね、親父も古い男で、食わしてやってんだから、文句言うな、みたいなタイプだったんでぇ、何か、コミュニケーションがウマく行かなかったみたいっす。…俺、また、運悪く、一人っ子だったから、マジで、あの空気悪い環境、辛かったっす。そしたらね、段々、おふくろが変なコトし出して…。
丞清　…何？
淳子　夜中、俺の部屋に入って来て、
丞清　えっ？！
淳子　や、そんな色っぽい話じゃなくて、こうね、何か、見た事もないワンピース着て入って来て、
丞清　俺のベッドの横にしゃがみ込んで、俺のお腹をポンポン叩きながら、子守唄を謳うんですよ。
淳子　ひゃ～。
丞清　ひゃ～、でしょ？　ひゃーですよ、俺も。
淳子　それ、何？　どういうコト？　お母さん、…その、心の病気とか…、
丞清　そういうんじゃないと思うんすよ。ただ、俺を赤ん坊扱いするのが楽しくてしょうがないみた

いで…。
淳子　…お父さんの浮気が原因なワケ？
丞清　俺が…高校生の頃から始まったんスけどね、直接の原因は…まぁ、俺、よく解んないすけど、あの二人、もっと喧嘩すれば良かったんじゃないかなって…。
淳子　…丞清君とかのかみたいに？
丞清　俺らの場合、喧嘩っつーより、俺が一方的に怒られるんすけどね。けど、ウマく言えないけど、家ん中、凍り付いたような寒さでしたよぉ。マジ、俺、ヤベェと思って。なんつーんすか？　無言のプレッシャー？　みたいな？　ぜってぇ、この家から出さないぞ、みたいな？　アレ、マジきつかったっす。それよりもさ、家中引っ掻き回すくらいの勢いで、暴れた方が解りやすいじゃないですか？
淳子　そうね。
丞清　…かのかは…ホントによくやってくれてます。ウチのおふくろとも、結局、何だかんだ言い合っても、笑顔の下で何考えてるか解んないような関係より、ずっといいと思うんです。
淳子　けど、嫁姑の問題って、男が考えるより深刻やろ？
丞清　俺は、…いつでも実家と縁切りますよ。…けど、かのかが、それはイヤだって。俺と舞凜は、きちんとした家があった方がいいって。
淳子　…へぇ。
丞清　…俺、メッチャ、愛されてるんです。
淳子　……。
丞清　…俺、実の親だけど…、おふくろとは相性良くないんです。…こんな名前付けられたんですから、きっと、生まれつき相性、良くないんです。
淳子　お母さんが付けたと？
丞清　らしいです。
淳子　…けど、ま、どいもこいも、丞清君が浮気する理由にはなっとらんと思うけどね。
丞清　…お義姉さん…。男って…どうしようもない生き物なんすよ。
淳子　そりゃあね、誘った夏帆も悪かとやろうけど…。
丞清　や、夏帆ちゃんは、そんな…。あれはお芝居の稽古だったんで。
淳子　まだ言うか。
丞清　や、ホントに…、あの、夏帆ちゃんに誘われたってワケじゃないんですよぉ、

☆　玄関の方から託也が入ってくる。

託也　どがん意味ですか？
淳子・丞清　わー！！
託也　今の、どがん意味ですか？
淳子　び、び、っくいしたぁ！　もー、何ですか、託也さん！
丞清　お、お義父さんが生き返ったとかと思いましたよ！

☆　二人の声を聞きつけて、かのかと海帆と夏帆が二階から階段へ向かう。

かのか　なん？　なん、今の？
夏帆　どがんしたと？
託也　夏帆ぉ！
海帆　託也君？

☆　託也、階段へ向かう。

夏帆　…や、来んで…。
淳子　何？　どがんしたと、託也さん？
託也　お前、…またやったとや？　えぇ？

夏帆　来んで！　いやばい！
託也　お前んごたんアバズレはぁ、ちゃーんと教育して、男の目に触れんごとしとかんば。
かのか　何ね、突然。
海帆　託也君、止めて。
託也　早速、あの男ば銜え込んだとか？

☆　託也、丞清を指差す。

丞清　…え、あ、あの。
夏帆　だけん、なん？　アンタには関係なかやろ。このド変態が。

☆　託也、階段に足を掛ける。

託也　なぁ、夏帆ぉ。何が気に食わんとや？　えぇ？　おいの何が気に食わんとか？
夏帆　いや、来んで！
かのか　託也さん、どがんしたと？
淳子　さっきの丞清君との話？　あいは、違うとよ！

☆　乃理子、夏帆の前に立ち夏帆を庇う。

託也　なんか、お前。どけ。
かのか　…夏帆、部屋に戻っときなさい。
夏帆　……。
海帆　夏帆、早う！
託也　海帆ちゃん！　そがん事して、良かと思うとるとや？

☆　夏帆、階段から離れる。

託也　待たんか、この、アバズレが！

☆　託也、階段を昇ろうとするのを丞清に止められる。

託也　お前が夏帆に手ぇ出したとか？
丞清　え？　や、俺は、…その、夏帆ちゃんには触ってませんし、触ってもらってませんし。
託也　あがん、あがんアバズレは、

☆　託也、淳子を見る。

託也　良うなか！　ただちに、然るべき処置ば取るべきですよ、お義姉さん！
淳子　…は？
海帆　託也君、やめてよ。
託也　なんか、あの女！
かのか　何で貴方が怒るんです？
託也　は？
かのか　貴方、…だって、ねぇ？　海帆の旦那でしょ？
丞清　そう、そうだよね？　いや、確かに、俺が悪いんですけど、アナタ、さっきから、ちょっとおかしいですよ？
託也　アンタ達んごたん家の人間はねぇ、要は、あっちゃならんとですよ。
淳子　はぁ？
託也　こがんねぇ、母親のシッカリしとらん家は、危なっかしゅうて見とられんですよ。

海帆　託也君！

☆　託也、駆け下りてきた海帆の髪を掴む。

海帆　きゃあ。
淳子　ちょ、何するとですか！
託也　コイツと夏帆の母親は、とんでもなか女やったでしょう？　ウチの親父ばたぶらかして金借りて、知らんぷりですよ。おかげで、おいの家は散々でしたよ。親父が死んだら、息子のおいがその権利ば主張するとは当たり前じゃなかですか。
淳子　何ね、そいは、
託也　あの女ですよ、あの女！　文句なら、あの女に言うて下さい。あの女が、借金の肩に自分の娘ば売ったとですよ。
淳子　えぇ？
海帆　やめんね…。もう、…その話はせんで。
託也　そいとにねぇ、嫁にしてやったら、何ですか、このバカ女！　出来は悪かわ、すーぐ、男ばたぶらかすわ！
海帆　ウチ、そがん事しとらん…！
託也　そいけんねぇ、コイツらの母親に言うてやったとですよ！　このバカ女じゃ、利子分にもならんですよって！
丞清　な、何だ、それ！？　アンタ、正気ですか？！
託也　そりゃ、コイツらの母親に言うて下さい！　あの女が、娘二人ば売ったっくさ！
海帆　夏帆の事は…、もう、…放っといてやって…。
託也　やかましか！　アンタ達が何て言うたって、おいは海帆と夏帆の所有者なんですよ！
丞清　ちょっとぉ、待って下さいよぉ。…人って、人を所有とか…そんなこと、できないんですよ？（かのかに）ねぇ？　（淳子に）ねぇ？　そうでしょう？　（託也に）物じゃないんですから。
託也　物以下ばい。
丞清　はぁ？
海帆　もう、もうやめて、託也君！　ウチ、ちゃんと返すけん！　一生、働いて返すけん！
託也　どうせ、まともな家じゃなかとでしょう？　ねぇ、お義姉さん！　おいがちゃんと、今後も目ば光らせて行きますけん！

☆　託也、海帆を離し、また階段を昇ろうとする。

託也　ほらぁ、夏帆！　出て来んかぁ！
かのか　やめて！
淳子　…やめて！　行かんで！

☆　かのかは託也の行く先を塞ぎ、淳子は下から託也を引っ張る。

託也　もう説明したじゃなかですか！　おいは夏帆ば買うたとですよ！
海帆　もう、夏帆ば苛めんで！　苛めんでよぉぉぉ！
託也　こいはイジメじゃなかと。良かか？　おいと夏帆の間には、契約ってもんがあると。お前もそうばい。そいから、お前の母親も！　おいはお前たちの人生ば握っとると！
海帆　もう、やめてよぉ！

☆　乃理子、託也の肩に手を掛ける。

託也　なんか、お前…、

☆　乃理子、そのまま託也の体を階段下へ突き飛ばす。

託也、悲鳴を上げながら階段を転げ落ちて行き、下で見ていた淳子と隣に立っていた丞清は、慌てて託也を避ける。
全員、呆然とその様子を見ている。
いつの間にか、夏帆と乃理子も、階段下に転がる託也を見ていた。

乃理子　…鬼、…退…治。
淳子　乃理子…。
かのか　…死んだの？

☆　かのかの言葉に、全員（乃理子以外）が淳子を見る。

淳子　え？
かのか　死んだの？
淳子　わ、解んないよ。
海帆　脈、確認してみて。
淳子　わ、わた、私がぁ？

☆　かのか、階段を駆け下り託也の横へ屈みこむ。そうして、手首を取って脈を確認する。

かのか　……。
淳子　どがんね？
かのか　……。
一同　……。
かのか　脈、ない、かも…。

☆　しばらくの沈黙の中、不意に乃理子が拍手する。
全員、止めることもできずに乃理子の拍手を聞いているが、やがて、夏帆、海帆、かのか、淳子の順で、拍手の輪が広がって行く。

丞清　えええ？

☆　最初は戸惑っていた丞清も、次第に気分が乗ったらしく拍手の輪に加わった。
やがて拍手は弱まって行き、沈黙が訪れる。

☆　翌日。時刻　九時。
五人姉妹が居間に並んで眠っている。
ただ一人、丞清だけが起きてゲームで遊んでいる。
部屋の隅に託也の体が横たわっており、タオルがかけられている。

☆　庭の前で車が停まる音。なずなが帰って来たらしい。
庭を横切って入ってくる。丞清が頭を下げる。
なずなは庭の柳の木を眺め、やがて、縁側へ腰かける。

丞清　おはようございます。
なずな　おはようございます。
丞清　…起こした方がいいですよね？
なずな　えぇ？
丞清　皆さん、お疲れみたいで、もう、ぐっすりです。
なずな　…そうよねぇ。疲れるもんねぇ、こういうのは。
丞清　…ですよねぇ。
なずな　あら？　あら、葬儀屋さん何時に来らすとやったかな？
丞清　一時だそうです。あ、大丈夫でしたか？
なずな　…ん？
丞清　お腹。
なずな　…あぁ、うん。何やろうかねぇ、こん子（お腹を擦る）も、父様とお別れするとが寂しかとかもしれんねぇ。
丞清　…ですよねぇ。

☆　なずな、立ち上がり、縁側から中へ入ろうとする。丞清、手を貸す。

なずな　よっこいしょ。
丞清　大丈夫すか？　やっぱり、女性は大変ですねぇ。
なずな　不思議なもんやねぇ。男女の間でしたこととに、何でか女ばっかいねぇ、こがん辛か思いばせんばいかん。
丞清　…ですよねぇ。
なずな　あぁ、重か。重かとよぉ、このお腹。
丞清　はい。解ります。や、解りませんけど、気持ち的には、俺も、せめてエールを送ります。
なずな　んふふふ。

☆　なずな、丞清の腕にしがみ付く。

丞清　お、お義母さん…。
なずな　…ウチだけかもしれん。
丞清　はい？
なずな　父様の死んでしもうたとば、ホントに悲しんどるとは、ウチだけかもしれん。
丞清　や、…そ、そんなことは、
なずな　ウチは…不安でしょうがなかと。…ウチはお腹の子と、乃理子ちゃんば抱えて、こいからどがんしてゆけば良かやろか？
丞清　…あぁ、そうですよねぇ。…あの、俺も…できる限り、力になりますよ。
なずな　…丞清さん…。（泣きながら、丞清に縋り付く）
丞清　お、お義母さん…。
なずな　丞清さんは、明日には帰ってしまうと？
丞清　あ、はい。
なずな　…もう少し、…残こられんと？

丞清　…あ、あぁ…、そ、そうですねぇ。の、残っちゃおう、かな…？
かのか　すーけーきーよー！

☆　丞清となずな、慌てて離れる。

かのか　お前、バカか？

☆　かのか、立ち上がる。

丞清　あわわわ、か、かのか。
かのか　あわわじゃない！　アンタ、犬？　動物？　獣？　ケダモノ？
丞清　……。（首を捻る）
かのか　下半身しかなかとか！
丞清　そんなこと！　違うよ、今のは！　ノーカン！　ノーカンでしょ！
なずな　あのねぇ、かのかさん、違うとよぉ。
かのか　アンタも、お腹の大きか時くらい、人の男に色目使うとやめてくれんですか？

☆　騒ぎを聞いて、乃理子以外の全員がバラバラと起き始める。

なずな　そがん、…色目なんか…、
かのか　そんで、アンタもイチイチ、乗るなよ！

☆　かのか、丞清の頭を叩く。

丞清　…はい。
なずな　ウチ、そがんつもりはなかったとよぉ。ただね、

☆　なずな、縁側へ。

なずな　ウチは、ただ、葬式の後に、…あん木ば、

☆　なずな、庭の柳の木を指差す。

なずな　あん木ば…伐ってしまおうって思うて。
かのか　そいやったら、好きに業者ば呼んで、伐ったら良かでしょ！
なずな　けどねぇ、ホラ、…あの木、縁起の悪かでしょう？　そいけん、ウチ一人やったら、心細かけんが…、
かのか　何ね、その言い分！

☆　淳子、縁側へやって来る。

なずな　あぁ、淳子さん。もうそろそろねぇ、葬儀屋さんの来らすっちゃなかかな？　準備、しといた方が良かろう？
淳子　…そうですね。
かのか　ちょっと！　まだウチの話が終わっとらんやろう！
なずな　…ごめんなさい、かのかさん。ウチ、気ぃ悪くさせるつもりじゃなかったとよ。
かのか　何ば言いよるとね、
淳子　かのか。…後にせんね。
かのか　姉さんには関係なかやろ！
淳子　良かけん、あの人の葬儀が終わってからにして。

☆　淳子、言い終えて部屋に戻る。

丞清　かのか、ごめん、俺、
かのか　……もう、怒らん。
丞清　え？
かのか　…もう、…良か。ウチ、もう知らん。

☆　かのかも部屋へ戻る。丞清、慌てて追いかける。

丞清　待ってよぉ！　かのか！　何で？　いつもみたいに怒ってよぉ！

☆　かのかは一直線に二階へ向かう。丞清もそれを追う。

丞清　待って！　かのか！　怒って！　怒ってよ！　いつもみたいにやってよぉ！
夏帆　…なずなさん、お腹大丈夫やったと？
なずな　うん。ちょっとね、疲れの溜まっとったごたん。

☆　なずな、夏帆に誘導されて居間へ戻りかけるが、途中で立ち止まり涙を拭う。

夏帆　大丈夫？
なずな　…父様、…もうすぐ、この家から出て行ってしまわすとねぇ。
夏帆　…うん。
海帆　清々するけどね。
夏帆　…早く、葬儀屋さん、来ないかな。
海帆　え？
夏帆　…早く、…パパ、連れてってくんないかな…。
海帆　（夏帆の手を取る）そうだよね。
なずな　そがん…、そがん、言わんで。みんなのお父さんやろ？
夏帆　…お父さんじゃなか。
海帆　……。（夏帆の肩を抱く）
夏帆　…鬼やったよ…。
なずな　そがん事なかやろう。夏帆ちゃんも海帆ちゃんも可愛がりよらしたたい。
夏帆　……。
なずな　夏帆ちゃんがお母さんの所からココに帰って来た時も、ホントに喜んどらした。

☆　夏帆、膝を抱える。

なずな　しょっちゅう、父様、言いよらしたよぉ？　『夏帆が一番可愛か。夏帆は、ずーっとどこにもやらん』って。
夏帆　やめてよ！
なずな　……。
夏帆　…気色悪か…、やめてよ…。
なずな　…けど、もう、二度と会えんとよ？　明日には灰になってしまわすとよ…？
夏帆　早く、…灰になれば良か。
海帆　…ホント…、長かったよ…、この二日間…。
なずな　そがん、そがん…、ねぇ？　淳子さん？　淳子さんは？　ホラ、最期のお別れば言うてやって？
淳子　…ウチは、…この人に言う事は何もなかです。

☆　淳子、立ち上がり奥の部屋へ向かう。

淳子　顔洗って来ます。
なずな　淳子さん…。

☆　なずな、夏帆、海帆が泰平を囲んでいる。
乃理子がゆっくり起き上がり、ゆっくり、ゆっくり、庭へ出る。

夏帆　もっと、…苦しんでから死ねば良かったとに。
なずな　…夏帆ちゃん。
夏帆　ママもパパも、もっと苦しんで死ねば良かったとに。
なずな　そがん、…そがん、親の事ば悪う言うたらいかんよ。
海帆　何で？
なずな　…なん？　なんで、そがん…、
夏帆　親やったら、何でも許されると？
海帆　悲しまんかったら、ウチらがおかしかと？
なずな　…だって…、親って言うたら…、ホラ…。
夏帆　『親』って言うたら？　…なん？　なずなさん。何なんですか？
淳子（声のみ）　あああ！

☆　なずな、海帆、夏帆、声に驚き部屋の奥を見る。

夏帆　…なん？
なずな　どがんした？　淳子さん？
淳子（声のみ）　もう、…やめんね！　話しかけんで！

☆　淳子、奥の部屋から走り込んでくる。

海帆　どがんしたと？
淳子　アンタ達！　早う、しなさい！
海帆・夏帆　え？
淳子　早う、こん人に、言いたかことば言いなさい！

☆　海帆、立ち上がり淳子へ駆け寄る。少し遅れて夏帆も淳子の元へ。

海帆　どがんしたと？！
淳子　燃えてしまうとよ！　明日には、こん顔ば、もう二度と見られんとよ！　ウチ、ずっと待っとった！　この日ば！　ここにこがんして、この男に言いたかことば言える日ば！

☆　淳子、海帆と夏帆の制止を振り払う。

淳子　携帯番号ば教えとったとも、その為さ！　この連絡が入るとば、ずーっと、ずーっと、一七年間待っとった！

☆　騒ぎを聞きつけて、二階から丞清とかのかがやって来る。

淳子　この男が、灰になる前に！
かのか　どがんしたと？！
海帆　淳子姉さんが…、
淳子　アンタ達も！　ホラ、早う、言いたい事は言いなさい！　この男！　ウチの人生ばメチャクチャにして！　自分ばっかいが正しくて！　ウチの、うっ達の心ば、ボロボロにし続けて来た、この男！

☆　淳子、庭へ降りる。

かのか　ちょっ、アンタ！
丞清　は、はい！
かのか　止めてよ！
丞清　あ、…うん！

☆　丞清、二階から慌てて降りてくる。その際に、ジーパンのファスナーを上げる。
しかし、淳子は手に斧を持って庭から戻って来る。

なずな　な、何ばすっとね、淳子さん！
夏帆　やめて！
淳子　見とかんね、アンタ達！　うっ達ば苦しめた鬼ば、姉ちゃんが退治してやるけん！
かのか　止めて！
丞清　む、むむムリだよぉ！
淳子　ウチは、もう、大人ばい。もう、怖がることは何もなか！　ウチと、かのかば泣かせた分！

☆　淳子、斧を振り上げる。全員が周りから避ける。

淳子　ウチとかのかば無視した分！

☆　淳子、泰平の枕元に斧を突き立てる。

海帆　きゃああ！
なずな　淳子さん！　やめんね！
淳子　（斧を抜きながら）ウチが…、子供やったウチが、…こん子達ば守ってやれんかった分！

☆　淳子、もう一度斧を突き立てる。

淳子　ウチが、こん子達ば連れて行けんやった分！　アンタが、乃理子も海帆も夏帆も、守ってやれんかった分！　アンタがウチのお母さんばおかしくさせた分！
かのか　姉さん…、やめて…。
淳子　ウチは普通の子になりたかった…。普通に、こん子達と遊んで、晩御飯食べて、…何でん良か！
毎日毎日、ただ、あの部屋に逃げ込む事しかできんかった…。そがんじゃなくて、もっと、…
妹たちば愛したかった。お誕生日会も、…気まぐれじゃなくて、アンタの気まぐれじゃなくて、
この世に生まれて来たコトとば、当たり前に喜びたかった！　うっ達が自由に遊んで回れる
庭！　いつお風呂に入っても、テレビ見ても、トイレば使っても怒られんような生活がしたかった！　アンタの気まぐれで、いつも自分ば消してしまうような、そがんと、…そがんと、イヤやった！

☆　淳子の言葉に、妹たち（乃理子以外）は全員泣く。

淳子　同級生のお父さんが羨ましかった…、他愛もなかうっ達の日常ば、ちゃんと、うっ達ば、愛してくれる人が欲しかった！

☆　その言葉はかのか、海帆、夏帆の心を突いた。
心が引き裂かれそうな程の憎しみと悲しみが、四人の姉妹を襲った。

淳子　ウチは…、泣きよるかのかに…何もしてやれんかった。乃理子にも…、海帆と夏帆だけは、可愛がってくれって言うたとに…！　じゃあ、誰が、うっ達に愛ば教えてくれると？　他人ば許

容できる心ば教えてくれると！　何ば言ったって、アンタは！

☆　淳子、また斧を振りかぶる。

淳子　アンタは自分だけが正しくて、ゆとりもなくて、誰も愛せん人間のくせに！
かのか　お姉ちゃん…。
淳子　お前に！　いつもうっ達の事を否定するお前に、言ってやりたかった！　お前は一生許されん！　お前はクズだ！　お前なんか…！
乃理子　淳子ちゃん。

☆　淳子、動きを止める。

乃理子　この木ば見るたび、辛かやろうね。悔しかね。淳子ちゃんはお姉さんやもん。シッカリせんばって思うとよね。…ウチね、辛か事のあっても、自分の中でおまじないば唱えると。淳子ちゃんにも教えてやるけんね。
淳子　真理子さん…。
乃理子　ウチは「一等賞」　一等賞、って、心の中で思うとよ。ねぇ、淳子ちゃん。淳子ちゃんの目で見て、耳で聞いて、そうして、淳子ちゃんの中で育って行ったものが、淳子ちゃんの大事な物ばい。ウチね、そいが良か。淳子ちゃんが自分で育てたものば見たかとよ。
淳子　真理子さん！
乃理子　淳子ちゃんにだけ、教えるね。今ね、ここ（お腹を擦る）に居る子は、淳子ちゃんとは血の繋がっとらんけど、けどね、淳子ちゃんが「妹」やって思ってくれたら、こん子は淳子ちゃんの妹になるとよ。…まだ、よう解らんね。…けど、覚えとって、淳子ちゃん。忘れたら、思い出して。今、淳子ちゃんが抱えてる辛さは、淳子ちゃんが一等賞になった時に、全部消える。全部、消えてしまうとよ。
かのか　…真理子さん。…何で、…何で居らんごとなってしもうたと？　ウチ、ウチもお姉ちゃんも、真理子さんのコト、大好きやったとに。
乃理子　ごめんね…。でもね、ウチには大事な仕事が残っとる。…そいけん、戻って来たとよ。
淳子　…なぁに？
乃理子　淳子ちゃんの中の「鬼」ば一緒に連れてってやる。
淳子　え？
乃理子　…恨みば残して見送ったらいかん。淳子ちゃんの中の鬼も一緒に煙にしてしまわんと。
淳子　ウチん中の、鬼…？
乃理子　ホラ、そがんとば振り回したらいかんやろ？　ウチに頂戴。

☆　乃理子、淳子へ手を伸ばす。かのかも階段から駆け下りてくる。
淳子は縁側へ歩いて行き、素直に乃理子へ斧を渡す。

乃理子　こん鬼の居らんごとなったら、淳子ちゃん。淳子ちゃんの中には、淳子ちゃんが育ててきた物だけが残るとよ。そいば、大事に育ててね。
かのか　真理子さん…。
乃理子　悔しかったね。辛かったね…。でも、もう、普通に悲しんで良かと。他の家の子と変わらんごと、普通に悲しんで良かとよ。
淳子　ウチ、…だって、何も育てて来とらん。何も残らん。この日だけ…、ウチが待っとったとは、この日だけやった。ウチが…ウチの手で、あの鬼ば退治することだけが…。
乃理子　後ろば見てみらんね。
淳子　え？

☆　淳子の後ろに、かのか、海帆、夏帆が立っている。
三人は淳子に寄り添い、やがて、四人で泣きはじめる。

乃理子は斧を持ち柳の木を見上げる。見上げて、やがて、その視線は空高く、上へ向けられる。

かのか　もう…あの人は死んだとばい。
淳子　うん…。
夏帆　もう、大丈夫。もう、もう動かないよ。
淳子　うん…。うん。
海帆　…お姉ちゃん、…泣かないで…。

☆　四人も空を見上げる。

☆　時刻は、やがて昼へと移って行く。
淳子は庭へ降り、乃理子の手から斧を奪い、また縁の下へ仕舞った。
そして、現れた棺にゆっくりと泰平が収められる。
五人の娘が泰平の棺を見下ろしている。泣いている娘もいるかもしれない。
もしも私の人生が感情の成分で構成されているとして、この鬼を退治した今となっては、私の心に大きな空洞ができるのではないだろうか。
だが、娘たちは思うのだ。
その『空っぽ』を埋めるのが、「一等賞」なのだ。
自分の目と耳と、そうして心に降り積もって行く物が、この先、自分の「一等賞」になるのだ。
自分たちを鬼にする原因を、娘たちはジッと見ていた。
逆に言えば、これから先、自分の不幸を呪おうとする時、不幸の総てを引き受けていた鬼が居なくなる。
自分の中の鬼を殺すというのは、そういうことなのだ。
この鬼は死んでも消えない。焼いても消えない。
この五人の娘が決別を選ばない限り、一生消えないのだ。
五人は、高く高く空を見上げる。
今、姉妹たちの中の鬼は茶毘に付されたのだ。

泰平（声のみ）　あぁ、何も、何も思い通りにならん。お前たちは、何も、一つも、おいの思い通りにならんね。

☆　丞清とかのかは玄関へ向かう。
入れ替わるように、どこからか携帯電話が鳴り始める。
全員（乃理子以外）は顔を見合わせ、横になっている託也を見る。
託也の手がモソモソと動き、やがて体を起こす。
しかし、全員、すぐに視線をお棺へ移した。

☆　クラクションが鳴り響き、居間にいる全員（乃理子、託也以外）は頭を下げる。

託也　1足す2足す、3足す…、（以下、十まで足し算が続く）

☆　かのか、戻って来る。

なずな　行ってしもうたねぇ。
淳子　大丈夫やったと？
かのか　え、何が？
淳子　丞清君だけ先に行かせたら、可哀想かっちゃなか？
かのか　だって、どうせ、向こうでもすることなかやろ？　ってか、ココに置いといたら、悪さばっかいするけんね。…誰かさん達が色目使うし。

託也　「五五」！　（両手を広げ、淳子たちに見せる。）
海帆　はいはい。託也君、着替えましょうねぇ。（託也の傍へ行く）
託也　1足す2足す、3足す、
夏帆　色目なんか使ってなかって。
なずな　そうよぉ、かのかさん。
かのか　うるさか。
淳子　もー、やめんねぇ。…永清君、言いよらしたよ。
かのか　なん？
淳子　かのかのコト、大好きって。
かのか　…なん、そがん事、…なんね、やめてよ。
淳子　だらしなか顔して。もぉ、デレデレして言いよらしたよぉ。
夏帆　あらー、良かったたい、かのか姉ちゃん。
かのか　やぐらし！　（夏帆の頭を叩く）
海帆　夏帆ぉ、あはははは、ちょ、手伝ってぇ！
夏帆　えー？　なん？　イヤばい。
海帆　見て見て、面白かっちゃん！　あははは。
夏帆　なん、なん？

☆　夏帆、海帆と託也の元へ走る。

海帆　はーい。ばんざーい。
託也　（両手を広げ、上へあげる）「五五」！
夏帆　出た、五五！
海帆　ホラ、ホラ、託也くぅん。ばんざーい。

☆　託也、両手を五五の形にして万歳する。

なずな　…託也さん、…人の変わったごとなったねぇ。
淳子　ぶふっ。
かのか　変わったっちゃなか？　興奮し過ぎて。
淳子　ぶはははは。
なずな　なんねぇ、二人とも。
淳子　じゃあ、ホラ、乃理子、ノリちゃん、おいで。

☆　庭の隅から乃理子が嬉しそうに歩いて来る。

淳子　ぎゃあ、アンタ、手の汚れとるたい！　ホラ、おいで！　手ば洗ってから着替えんば。

☆　なずな、入れ替わりに縁側へ座る。

なずな　永い永い、仮通夜やったねぇ。
淳子　（乃理子を連れ、部屋を横切りながら）なずなさん。
なずな　はい？　なん？
淳子　（声のみ）里村とは、長いんですか？
なずな　え？
淳子　（声のみ）とぼけんで下さい。里村ですよ。　ああん、ダメ、もっとゴシゴシ洗いなさい！
海帆　ちょうどね、ウチらが全員、ここに居る時に、電話かかって来たっちゃん。
なずな　…あらぁ、そうねぇ。
淳子　（声のみ）全部、里村から聞きましたよ。なずなさん、里村とデキとるとでしょう？
海帆　そんで、パパの葬儀が終わったら、この家に呼ぶつもりでしょ？

託也　1足す、2足す、
海帆　はいはい、託也君、ホラ、ジッとしてね。（ネクタイを結んでいる）
なずな　そうねぇ、…男人は、お喋りかねぇ。
かのか　言っとくけど、里村はどうせ、お金目当てですよぉ。
淳子　（声のみ）そやろうねぇ。（乃理子を連れて戻って来る）あがん男やもん。ってか、なずなさん、あいがどがん男か知っとると？
なずな　…大体はねぇ。昔、この家に出入りしよったとか。
かのか　あん人の、父の小間使いみたいなモンやったけどね。
淳子　でも、あん人は、遠い昔、出入り禁止になったはずやけどね。
なずな　そいも聞いとるよ。三番目の奥さんとデキてしもうて、一緒に追い出されたとかねぇ。
海帆　ウチのママやけどね。
なずな　色々聞いとるばい。

☆　淳子、乃理子を座らせ喪服を渡す。

淳子　ホラ、こいに着替えなさい。

☆　淳子、乃理子へ上下黒の服を渡し立ち上がる。乃理子、すぐに淳子の後を追う。

淳子　鬼ごっこじゃなくてぇ、着替えると。
なずな　…言うちゃなんけどねぇ、一個の家に、女は何人も要らんっさ。

☆　なずなの言葉に、淳子と海帆は動きを止める。

なずな　ああ、恨めしか。憎らしかよ、アンタ達が。そいけん、ウチは、あの庭の柳の木ば伐ってしもうて、この家で明日から、里村さんと一緒に住むとさ。
淳子　ところが、どっこい、ウチも、父の葬式が終わったら、正式にココに住むとです。
なずな　…えぇ？　なんて？
淳子　海帆も夏帆も、もちろん、乃理子も、この家に住むとです。
なずな　そがん…、何で？
淳子　…ここが…うっ達の家やけん。
なずな　そがんと、ズルかぁ。
淳子　…ウチ、実は…会社、辞めてしもうたとですよ。
なずな　えぇ？
淳子　だって、父の葬儀に出るとに休みばくれって言うたら、ダメって言うとやもん。ウチの最大のイベントば、目標としてた最大のメインイベントば潰そうとするとやもん！
かのか　姉ちゃん、鬼、出てるよ。
淳子　あ、つい。
海帆　そいに、ウチは無職やし、託也君も、…ねぇ、もう、お仕事ムリやしねぇ？　あ、ウチは、一旦、マンション引き払って来るけん、ちょっと遅れるけど。
なずな　…そっかぁ。
淳子　かのかは…、かのかは、もう立派に、自分の家ば作って行きよるけん。
かのか　…そりゃ、戻って来たかけど…。…や、でも、あのバカが浮気したら、すぐ舞凜ば連れて戻って来る。
なずな　いやぁ、なんか…、気疲れするばい。そがんいっぱい、娘のできたら。
夏帆　ウチら、まだ、しばらく、新しいパパは要らないんで。

☆　淳子、縁側へ行く。

淳子　あの木、伐りましょう。

なずな　…思い出木じゃなかと？　お母さんが首ば吊った木やろう？
淳子　思い出のワケ、なかでしょう。

☆　かのかも縁側へやって来る。

かのか　そいで、あそこに花壇ば作って。
淳子　毎年、みんなのお誕生日会やって、クリスマスも、お正月も。…やり直すんです。ウチら。
かのか　ええ、いいなぁ、楽しそう…。ウチ、ホント、マジ、度々帰って来るけんね。
なずな　…そうしたら、ウチ、邪魔かたいねぇ。
淳子　血の繋がらんでも、…その子はウチらの弟です。
なずな　……。（お腹を擦る）
淳子　けど、里村との野望は諦めてもらわんば。

☆　着替え終わった乃理子、庭へ降りる。

淳子　コラ、もう、砂遊びしたらいかんよ。
なずな　…考えさせてもらえるやろうか？
淳子　え？
なずな　ウチ、正直、里村さんと別れられるか解らんし…。
海帆　どこがいいの？　あんなスケベ親父。
淳子　あら、アンタ、里村、覚えとると？
海帆　覚えとるよ、何となく。イヤな感じの男やった。
夏帆　ウチも覚えとるよぉ。あの男、いっつも淳子姉ちゃんに付き纏いよらしたたい。
かのか　え、そうなの？
淳子　うぇ、思い出した…。そうさ、あの男。いっくらウチが愛くるしい中学生やったけんって、一回ねぇ！　風呂ば覗こうとしたとよ、あの男！
かのか　そうねぇ。女ばっかいの家に置いとくごたん男じゃなかねぇ。丞清同様。
なずな　…別にねぇ、里村さんでなくても良かったとけどねぇ。
海帆　そうなの？　じゃあ、別れた方が良くない？
なずな　…誰でも良かったとよぉ。父様じゃなかったら、ウチには誰でも同じ…。
淳子　なずなさん…。
なずな　え？
淳子　男の趣味、悪いんだ？

☆　託也がゆっくりゆっくりと縁側へやって来る。

海帆　託也君。
託也　……。
海帆　いい？　今日、お通夜で会社の人に会ったらぁ、こう言ってね？　「僕は、お風呂で滑って頭を打って、バカになりました。」
託也　…カになり、した。
海帆　「僕は今まで、海帆ちゃんにも夏帆ちゃんにも悪い事をしてきた、クソのような男です。」
託也　…んー。
海帆　んーじゃなかと。
託也　1足す、2足す、3足す、
淳子　そい、気に入っとるごたんね。
海帆　コレ、よく聞いとってん。
淳子　ん？
託也　8足す、9足す、10、は、五五！（両手を広げて海帆と淳子に見せる）
淳子　ぶっ。

なずな　…あぁ、五五！
海帆　わー、託也君、計算、お上手。
夏帆　見てよ、この顔！　夕べまで、ブイブイ威張り腐りよったくせにぃ。
淳子　ぶふふふ。
なずな　んふふ、こいやったとねぇ。
海帆　もう、楽しくって、やめきらん！
夏帆　あははは、海帆、鬼の出とるよ（笑）
海帆　はい、託也君、もう一回！
託也　1足す、2足す、3足す…、（十まで数えて『五五』を繰り返す。）
淳子　さ、タクシー呼ぼうかね。
かのか　お数珠とか、大丈夫？

☆　なずな、夏帆の手を借りて立ち上がる。淳子、電話へ向かう。

淳子　数珠も入れた。大丈夫。（受話器を取る）さん、さん…の、

☆　淳子、プッシュボタンを押す手を止め俯く。

なずな　あ、大丈夫よ。ウチ、一人で歩けるけん。
夏帆　ホント？
なずな　そいよりも、あの数学者ば連れて行かんばやろぉ？
海帆　あはは、数学者！
夏帆　やぁ、いやばい！　ウチ、そがんとの面倒、見らんけんね！
海帆　でも、何か…、可愛くない？　託也君。
夏帆　可愛くなか！

☆　海帆、託也の手を取り玄関へ向かう。

なずな　そいにしたって、急に、何でまた、託也さんはそがんなってしもうたと？
海帆　そいけん、夕べ、お風呂場で滑って、頭ば打ってしもうたとさ。
なずな　ホントにぃ？　そがん事のあるとねぇ、この家で二回目ばい？
海帆　ホントに。
夏帆　ノリちゃんのは違うけど、コイツ（託也）は天罰さ、天罰！

☆　海帆、夏帆、なずなは喋りながら玄関へ。

かのか　じゃあ、姉ちゃん、乃理子連れて来てね。

☆　かのかも玄関へ向かう。だが淳子は依然、動かない。

淳子　…まさか…、泣くとはね。

☆　淳子、慌てて目元を拭う。そうして庭を見ると、乃理子がジッと自分を見ていることに気付く。

淳子　……。
乃理子　……。
淳子　アンタも、早う、きちんと靴ば履きなさい。

☆　乃理子は動かない。ジッと淳子を見ている。

淳子　…内緒ばい？　（シーッと口元に人差し指を立てる）
乃理子　……。（同じジェスチャーをする）

☆　淳子、庭を通り越し空を見る。そうして、もう一度、電話を掛け直す。

淳子　みな、さん、の、はい、はい…。あ、もしもし？　タクシー一台、お願いしたいんですけどぉ。

☆　乃理子、淳子が見ていたよりも、更に高く、高く空を見る。

淳子　はい。重尾町の勝磯です。…えぇ、はい。はい、そうです。お願いします。

☆　淳子、電話を切りもう一度庭を見る。

淳子　…真理子さん。

☆　乃理子、振りむかない。

淳子　真理子さん。

☆　乃理子、ずっと空を見ている。

淳子　ウチのお母さんがちょっとおかしくなった時、お母さんば叱りつけてくれたとが、ホントに嬉しかったとよ…。…ねぇ、あん時の朝顔は、ちゃんと咲いたとやったっけ？　こがん家で、ホントにどうしようもなかったけど…、真理子さんの目には何が映って、何ば感じたと？　ね、そこから、…何が見える？

☆　淳子、気を取り直し。

淳子　乃理子、ノリちゃん！

☆　乃理子、振り返る。

淳子　行くばい。おいで、一回コッチ来てから、ちゃんと玄関から出なさい。

☆　淳子、玄関へ行きかけてふと立ち止まる。そして、耳を塞ぎ、家を見回す。
部屋は先ほどまで家族がいた名残を残し、静かにここに存在していた。

☆　淳子は思い立ったように部屋を歩きまわり、テーブルの上の物を手で払いのけ、壁のカレンダーを破り、泰平がいつも座っていた座布団を掴んで放り投げた。

淳子　うわーん！

☆　淳子、床へ座り込み、大声で泣き出す。

淳子　うわーん！　うわーん！　…ほ、ホントは…っ、普通に…送りたかった…っ、だって、…どがんすれば良かったと？　どがん風に…別れれば良かと…？　悲しくなんか…なかとに…！
悲しくなんかなかとに…！　何で、勝手に…涙の出て来ると…！　お父さん…の、お父さんの…死んでしもうた…！　あがん…っ、勝手か人…っ、今、…今まで…っ、ウチ、…一回だって、好きって思えんやったっ。…も、…お父さんの…声が…聞こえん…。も…一生…聞こえん…！

乃理子　じゅ…こ…ちゃ…。

☆　淳子、庭を見る。そこには乃理子が立っている。

乃理子　　一等賞。

☆　乃理子、空高く人差し指を掲げる。

乃理子　　一等賞。
淳子　　うん…。
乃理子　　一等賞。
淳子　　うん。
乃理子　　一等賞！

☆　乃理子の手は、いつまでも高く、高く掲げられた。
淳子、何度も涙を拭い、乃理子と同じように人差し指を掲げる。
「一等賞」　「一等賞」…二人の声は響いた。
やがて、庭よりタクシーのクラクション。
それでも、二人は指を掲げ続けた。

☆二〇一三年、初夏。
佐世保市重尾町。
天気は、晴。
鬼と言えど、逝き道は見通しが良い方がマシであろう。

例えば、この五人の娘の人生が感情の成分で構成されていたとして、
今、五人に降りかかる感情は、一体何であろうか。
そのおぞましき過去の憎しみの産物である『鬼』は、
殺しても死なない、焼いても死なない。
自分で決別するしかないのだ。
自分が「一等賞」を目指すしかないのだ。

鬼が逝く道は、何故か優しい日差しが差し、
淳子の『空っぽ』に、ゆっくりと新しい光を注ぎ込んだ。

（閉幕）